



535
220



始



535
220

事故本
189-190

69



高島素之著

社會進化思想講話

アテネ書院

大正
14. 8. 2
内交

序

近世に於ける一切思想の樞軸が進化論に置かれてゐることは論を俟たない。進化論は初め生物學上の一學説として提出され、ついで宇宙觀人生觀上の一支點として哲學と結びつき、最後に社會發展上の中樞概念として、凡ゆる社會運動、勞働運動の推進動力となるに至つた。今日、社會思想と稱して知識階級なる社會群の常識的水準に普遍化された思想範疇の中樞支點となつてゐるものは、要するに社會方面に應用された進化思想以外の何ものでもない。

そこで、進化論そのものの解説を與へることは今日もはや問題とすべきではないが、進化論に基礎づけられた諸思想が、所謂社會思想なるものと如何なる形態に結合されてゐるか、從來著名の學者思想家に依つて提供された社會上、政治上、哲學上の諸定説が生物進化の觀念と如何なる程度に、如何なる様式に交渉してゐるか、ゐないかを考察することは、あながち無益の努力でないと思

ずる。本書は斯かる批判的の立場から、近世に於ける著名諸家の思想學説を出
來得る限り通俗的に觀察したものであつて、近世社會思想の高級常識に對する
指針たらしめんとしたものである。

本書は曩に『社會主義と進化論』と題して刊行したものであるが、今回題を
新たにして發行するに當り、全般的に訂正を加へて編纂を革命した。然し立論
の本質は舊態を維持した。蓋し本書の内容は、アメリカの社會主義者アーサ
・リユキスの諸著書に依つたものが極めて多く、考想の立脚點も成るべく著者
の私見を隠蔽するに努めたものであるから、この點まで訂正を延長するとき
は、自然本書の特色そのものをも没却するに至ることを虞れたのである。隨つ
て本書の主張的方面は、必ずしも著者現在の主張を如實に表現したものでない
ことを明かにして置く必要がある。

大正十四年六月十四日

著 者

目 次

第一講 進化説と社會進化

——ダーキン説とデ・フリー説——

- 一、生物進化の原因——二、淘汰は節——三、ダーキンを誤るダーキン學徒——四、漸變説と突變説——五、月見草に得た暗示——六、新ラマルク説の打撃——七、生物學者と地質學者の衝突——八、時代の犠牲者ラマルク——九、佛國革命の代辯者キユヴェー——十、商工階級のダーキンと労働階級のデ・フリー

第二講 遺傳説の兩派

——ラマルク説とワイズマン説——

- 一、はしがき——二、ラマルク派の遺傳説——三、死ぬ生物と死なぬ生物——四、遺傳を掌る細胞——五、兩派の唾み合ひ——六、『習得性』の遺傳有無——七、足の小指と駱駝の隆肉——八、尾の無い猫——九、ワイズマン勝つ——十、ワイズマン説と社會問題

目 次

第三講 競争と協同

——クロボトキンの相互扶助論——

四三

- 一、進化論史上の五人——二、『自然の状態』——三、ダーキンとクロボトキン——四、動物界の相互扶助——五、新種の発生——六、野蠻人の相互扶助——七、未開人の相互扶助——八、近世に於ける相互扶助

第四講 進化と蕃殖

——マルサスの人口論と收穫遞減の法則——

六七

- 一、暑中の綿入れ——二、マルサス説の根本——三、生殖と蕃殖——四、人間の食物範圍——五、收穫遞減か收穫激増か——六、收穫激増の法則——七、人口論の社會的背景

第五講 生物學と社會主義

——ヘツケルの社會主義論批判——

六七

- 一、知達ひの議論に基く紛争——二、ダーキン説と社會主義——三、ヘツケルの主張——四、ヘ

- ツケルの自縛自縛——五、悪平等のアルゲオアの起原——六、蜜蜂の階級——七、自然界の競争と人間社會の競争——八、法則の認識と社會の進歩

第六講 宗教と社會

——キツドの社會進化論——

二二

- 一、社會學の後れてゐる理由——二、競争と漸變——三、淘汰と社會進化——四、理性の否定——五、キツドの貧困觀——六、キツドの社會主義觀——七、キツドの歴史觀——八、社會主義と生存競争——九、宗教の使命——十、僧侶と新聞記者と教員

第七講 哲學の科學化

——コントとヘツケル——

二二

- 一、哲學と科學の闘争——二、コントの功績——三、個體は種屬を繰返す——四、コントの人知發達論——五、個人心理と人類心理の類似——六、科學の分類——七、科學の研究方法——八、科學の發達階梯——九、コントの空想

目次

第八講 社會主義犯罪學…………… 一六〇

——ロンブローゾーとフェルリ——

- 一、眞理に國境あり——二、ロ氏犯罪學の社會的意義——三、ロンブローゾーの功罪——四、トゲ一本の力——五、自然と犯罪——七、社會が産む犯罪——七、戦争と兒童の刃傷沙汰——八、犯罪衛生——九、犯罪醫術——十、無定期隔離

第九講の保守的ヘーゲルと革命的ヘーゲル…………… 一八七

——スチルネルの無政府主義——

- 一、結果は豫想を裏切る——二、妖覺無政府主義の正體——三、保守的ヘーゲル——四、革命的ヘーゲル——五、ヘーゲル哲學の矛盾——六、偶像から偶像へ——七、スチルネルの幽靈——八、ヘーゲル左黨の完成

第十講 單稅論の正體…………… 二〇八

——資本主義の辯護人ヘンリー・ヂョーヂ——

- 一、土地と資本の争ひ——二、勞働階級が漁夫の利——三、地主に對する義人の叫び——四、スヘンサーとヘンリー・ヂョーヂ——五、マルクスの炯眼——六、利子の悲哀——七、炯眼なる筆首

目なる編輯——八、ヘンリー・ヂョーヂから社會主義へ

第十一講 資本主義と無政府主義…………… 二二六

——スペンサーの社會有機説と個人主義——

- 一、資本主義の兩面——二、警むべき二つの錯誤——三、コントとヘッケル——四、社會と個體——五、社會と個體の異同——六、商人と利潤——七、政策、學問を裏切る

第十二講 認識論と唯物論…………… 二四四

——カントとカウツキー——

- 一、唯物論的認識論——二、兩極端の思想——三、カントの認識論——四、カント説と唯心論——五、唯物論との衝突——六、現象と實在——七、一種の唯物論者——八、カウツキーの批評

——目次終——

社會進化思想講話

第一講 進化説と社會進化

—ダーキン説とデ・フリー説—

一、生物變化の原因

ダーキン説は進化論の全部ではないが、進化論と言へば直ちにダーキン説を意味するかの如くに考へられてゐる。それはダーキンの提唱した自然淘汰説が、他の學者の提説に比して完備するところが多かつたからである。然し自然淘汰説にも、幾多の缺點があることは否み得ない。

自然淘汰説の最も著しい缺點は、この學説を以つてしては、進化の直接の原因を説明することが出来ないといふことである。ダーキン祖述者の中には、自

然淘汰を以つて進化の原因と見做す學者が少くない。然しこれは大變な誤りである。

自然淘汰は既に存在する變化の淘汰である。變化がなければ淘汰はない。淘汰は變化を助長するが、變化の無い所に淘汰の行はるべき理由はない。即ち變化は淘汰の條件でなくてはならぬ。随つて進化の原因、少なくともその直接の成因は、自然淘汰でなくて變化でなければならぬ。

ダーキンも此事は十分に認めてゐた。ただ彼れは此淘汰の成因たるべき變化が如何にして生ずるかを説明し得なかつたのである。そこで彼れは生物學者のお定りの遁辭たる『自生』に隠れ場を求め、『自生變化』と云ふ言葉を用ひてゐる。即ち變化は自然に偶生するといふのである。これでは少しも科學的の説明にはならないのであるが、然し斯くの如き無理な遁辭に縋つて迄も變化を説明しようとしたところに、ダーキンの慧眼がある。少なくともその祖述者の亞流

でないことが判る。何故ならば、かく變化を自生に求めたといふことがすでに、淘汰以外の方面に變化を説明すべき論據の必要を認識したことになるからである。

二、淘汰は篩

兎に角、生物界に變化の事實が働いて、それが各種の新形態を造り出さない間は、自然淘汰は作用し得るものではない。斯くの如き新形態が発生した後に、始めて淘汰の力が現れて来て、そのいづれを保存し、いづれを破壊すべきかを決定する。

生物學者コーガンの指摘した如くに、自然淘汰の職分は、豫め提出されたもの、存続を決定すること以上には出でない。かく提出さるべきものを造り出すのは、自然淘汰の權限外に屬する。デ・フリーはこれを説明して、『自然淘汰な

るものは、畢竟一つの篩に外ならない。それは多くのダーキン反對論者（また不幸にして多くのダーキン主義者）に依つて屢々主張される所とは異なり、自然力ではなく、進化の直接の原因となるものではない。それは、いづれが生き、いづれが死すべきかを選択する篩に過ぎぬものであつて、進化の一步一步とは没交渉である。進化の一步が行はれた後、そこに始めて篩が働いて不適者を芟除するのである』と。コープ教授の言葉を借りていへば、『自然淘汰説は、適者生存を説明することは事實であるが、適者の起原を説明し得るものではない。』更らにアーサー・ハリスに従へば、『自然淘汰は適者のサーヴィアル（生存）を説明するとはいへ、そのアライヴァル（出現）を説明し得るものではない』のである。

新ラマルク派とワイズマン派との論争は、この變化の原因を中心としてゐた。即ち前者は、生物個體がその全生涯に取得したる性質の遺傳に變化の原因

を求め、後者は雌雄の異りたる胚種細胞の混合體に依つてのみ生ずると説いたのである。この論争は大體に於いてワイズマン説の勝利に傾いたが、しかし双方とも實驗的に自説を論證することは出来なかつた。かくてこの問題に關する多年の論争は、結局遺傳及び變化の關が、如何に無限の奥深さを以つて横つてゐるかを知らしめたに過ぎない。變化の原因については、依然として『自生』の水準を一步も越えてゐないのであつて、この問題の研究に畢生の努力を注いだデ・フリーでさへも、自説を稱して『自生變化説』と言つてゐた有様である。

三、ダーキンを誤るダーキン學徒

然し變化の原因に就いては斯く五里霧中の状態を脱しないが、變化の様式に就ては、ダーキン以後驚くべき新發見が成し遂げられた。デ・フリーこそ實にその發見の殊勳者である。

ダーキンに依れば、生物變化の様式は、漸急さまざまである。即ち何百年といふ長年月の間、目に見えぬ微細の變化の蓄積に依つて新種の生ずる場合もあるが、これに反して、一夜にして大突變を遂げるやうな場合も無いとはいへない。ダーキン自身は確かにこの兩面を許容してゐた。然るに後世、ダーキン説と云へば、たゞ漸進變化を認めて、突變的變化を全然否定したかの如く考へられるやうになつた。これはダーキンの罪ではなく、専らその祖述者、主としてワレースの責任である。突變説の提唱者を以つて任ずるデ・フリーもこの事實は十分に認めて、『ダーキン説に向けられた反對論の大部分は、その熱心に過ぎたる學徒の主張に對してのみ妥當である。而もこれ等の主張は、ダーキン自身の文献中には何等發見されないところのものである。後にも説く如く、この點に於ける最大責任者の一人は、ダーキンと同時に自然淘汰説を發見した、アルフレッド・ラッセル・ワレースその人でなければならぬ』と、彼れは言つてゐる。

四、漸變説と突變説

ワレースは、一切の變化を目に見えぬ微細の變化のみとなし、名づけてこれを波動的變化と呼んだ。生物の性質は、岸邊に揺ぐ小波の如く絶えず動いてゐるが、それは動搖であつて變化の域には達せぬ。勿論、この動搖は結局變化を喚起する原因にもなるが、それには實に驚くべき長年月を要するのである。

デ・フリーはこの説を排斥して、生物の變化は決して斯くの如き不斷的動搖の果積から生ずるものではなく、何かの拍子で突然發現し又は突然停止するものであると説いた。彼れは大呼して曰く、變化は漸進でなくて急進である。貯蓄的にあらずして投機的であると。

五、月見草に得た暗示

これは實に彼れが多年の實驗の結晶である。彼れは一日和蘭アムステルダム附近のヒルヴァサムに於て多數の月見草を發見した。これは學名をラマルキヤナと稱するもので、もと米國から移植された野生を好む植物である。デ・フリーの發見したものは、おもふに附近の公園から迷ぐれ出たもので、野生に還つてから約十年を経過したものであるといふ。其翌年、彼れは右の月見草の間に二つの全く新たなる種類を發見した。これに依つて彼れは非常なる暗示を受けたのである。

彼れは當時何本かの月見草を自家の庭園に移植して、前後十三年間の研究を遂げた。この十三年間に、五萬本以上の月見草が繁殖したが、その八百本は、全然他と異なる性質を有するものであることが判明した。デ・フリーは苦心研究の末、これ等の八百本が七つの新種に大別せらるゝ事を發見した。一方彼れは、此等の月見草をば最初に移植したヒルヴァサムの原野を調べた時、此處にも同

様の現象が生じてゐることを發見した。

かくて彼れは、この些細なる月見草の實驗から、凡ゆる生物の新種も亦、斯様に短日月の間に發生すべき事を提唱したのである。尤も彼れの主張する突變は、常に隨所に行はれると云ふのではない。米國カリフォルニア大學で試みた彼れの連講第四回は『定時的突變の假定』と題するもので、『月見草と同屬の櫻草は今のところ殆ど無變化状態に止まつてゐるやうに見える。然しそれは過去に於いて大突變を遂げた反動であるかも知れず、而してその當時は恐らく月見草の方が無變化状態を呈してゐたではなからうか。斯くの如き停止期と突變期とは、必ず多かれ少なかれ規則正しく、相互交代するものであつて、一切の事實は明かにこの結論を指示する』と云ふのであつた。

六、新ラマルク説の打撃

デ・フリースはまた生物の直接順應を否定することに依つて、新ラマルク説に致命的打撃を與へてゐる。

新ラマルク説に依れば、『變化は使用不使用の結果である』となす。彼等は曰く、『車夫の脛が太く、詩人の腕が細いのは、前者は屢々その脛を使用し、後者はその腕を使用することが稀なるがためである。この變化こそ即ち、いづれも使用不使用の直接順應の結果である』と。

デ・フリースは、この説に對して正面から否定して曰く『變化は使用不使用に因はず、凡ゆる方向に行はれるのである』と。これは要するにダーキン及びその後繼者たるワイズマンの所謂『偶發的』變化を祖述したものであつて、スペンサー、ヘッケルの如き、主として境遇に對する順應に變化の方向を求めたものと、正反對の位置に立つものである。

デ・フリースはこの問題に就いて、なほ次の如く言つてゐる。『自然の無駄と云

ふことは、極めて重要な現象であつて、正に一つの原則とも稱すべきものである。我々はこれに依つて進化學上幾多の困難を説明することが出来る。若し自然が一つの佳良なる新性質を作る爲に、同時に十若しくは二十、或はそれ以上の不良なる性質を造る必要ありとすれば、全く偶然的に進化の行はれ得ることを直ちに認容せねばならぬ。斯くて順應の直接的原因に關する一切の假定は徒勞に歸し、ダーキンの提唱した大原理は再び至上の地位に就くであらう。』

七、生物學者と地質學者の衝突

デ・フリース説は以上の外、いま一つ在來の難問題を解くに有効である。それは生物進化が經て來た年月の長短に關して從來地質學者と生物學者との間に蟠れる意見の不一致である。即ち生物學者にとつては生物が今日まで經て來た期間は、實に幾億萬年に上らなければならぬのであるが、反對に地質學者の主張

するところでは、概して遙かに短年月であるとされるのである。

地質學者ケルヴィンは、地球の年齢を二千萬年乃至四千萬年と算定した。またジョージ・ダーキンは、月が地球から分離した時を約五千六百萬年以前と見た。その他著名なる地質學者ゲーキイは、地殻の年齢を高々一億萬年と概算し、ジョリーはこれを五千五百萬年、デューボアは三千六百萬年と見た。いづれも生物學者の要求する所よりは、遙かに短少の期間である。

こゝに於いて『要するに、生物發達の年數は到底徐行的進化説の要求と一致しない。……斯くて生物學者の要求と地質學者の研究の結果とは、突變説を基礎としてのみ十分なる調和を見出し得るのである』と結論してゐる。

八、時代の犠牲者ラマルク

デ・フリーの變化説は概略以上の如くであるが、然らばこの變化説は社會的に

如何なる意義を有するであらうか。これを説くには、少なくとも一世紀以前に溯つて、その以後の主なる生物學者の所説を對照し考察する必要がある。

近世に於ける最初の而して最大なる進化學者はジャン・ラマルクである。彼れは其絶大なる學識と不撓の勤勉を以つてして、猶かつ赤貧洗ふが如き境遇に物故せざるを得なかつた。これ彼が時の權力階級の利害に一致せざる新説を提唱したからである。彼れは當時の凡ゆる封建的勢力を敵とした。封建制度の要求する神學的色彩の濃厚なる思想が瀾漫してゐる當時に於て、彼れの反神學的進化説は、新興階級たる商工階級の利害に一致するものであつたが、商工階級は尙未だこれを自覺する程の域に達してゐなかつた。かくして彼れは落魄不遇の裡に一生を終つた。

九、佛國革命の代辯者キユヴィーエ

ジャン・ラマルクに次いで現はれた大生物學者はキュヴィーエである。彼れは一面に於いて生物の進化を否定すると同時に、他面また天地突變説（キヤダクリズム）を主張した。彼れに従へば、生物は進化の結果として生じたものではない。

一切の生物は今尙ほ天地創造の當時と同一の状態を維持してゐる。たゞ、この宇宙間には偶々大突變が行はれ、その都度在來の生物は全滅して、新しき生物が生じ、次の大突變までは幾百萬年を経過すると雖も何等の變化を齎らさぬのである。

キュヴィーエの天地突變説は、正に佛國大革命の科學的代辯と見做すべきものである。革命以前に於いて歐洲の新興商工階級は、封建的勢力の壓迫下にあらゆる苦楚艱難を嘗め盡くした。實際、彼等にとつて、封建貴族を一舉に覆滅して自ら權力階級たらんと希ふより以上の願望は無かつたのである。さればキ

ュヴィーエが、全能の神の聖名に依つて、宇宙の突變を提唱したことは、權力に渴く彼等商工階級の心には、正に大旱の雲霓でなければならなかつた。斯くしてキュヴィーエは時代の寵兒となつたのである。

然しながら彼れの説は、彼れの死と共に殆どその片影だに没して終つた。蓋し商工階級がその權力者たる地位を全うすると同時に、突變思想に對する彼等の興味は次第に薄れて行つた。彼等は自ら權力者たるべく、社會の突變を要求したが、既に權力者に成り終せた時に於いては、現状維持の爲に全力を傾倒せねばならなかつた。彼等は斯くして戦闘の使徒から平和の使徒へと變つて行つた。と同時にキュヴィーエの天地突變説は、一顧の値だになき迷信として彼等の腦裡から消え失せたのである。

十、商工階級のダーキンと勞働階級のデ・フッ

ダーキンは自然淘汰説を提げて登場したのは、將さに此時である。勿論ダーキンは進化を説き、變化を假定した。然しながら彼れの學徒は斯くの如き變化や進化は極めて徐行的のものであることを主張したのである。ダーキン學派に取つて生物進化に十分の時間は、一百萬年に相當するものであり、一の種屬から他の種屬が生ずるまでには、實に何十萬何百萬といふ長年月を要することになる。一切は進化する。商工階級の權力地位もいつかは滅亡の時が来るであらう。然しながら、それは一種屬から他種屬が生ずる場合と同じく、一朝一夕の沙汰ではないのであつた。

ダーキン説はまた一方に生存競争、適者存続を主張する。時代の勝者たり適者たることを以つて自任する新興權力階級に取つて、斯くまで都合良き合言葉が他にあらうか。斯様にしてこの學説は、新興商工階級壯年期の代辯哲學たる任務を完全に果し得た。

然しながら、商工階級が漸くその老熟期に入ると共に、また一つの新階級が頭を擡げて來た。而もこの階級は、嘗つて商工階級が封建貴族に對して、急激なる革命を要したと同じ意味に於いて、商工階級に對し、一つの社會進化的大動搖を期待してゐる。

新興商工階級の革命熱は、嘗て生物學界にキユヴィエの天地突變説を苦作せしめた。デ・フリーの變化説は正にそれと同じ意味に於いて、古き商工階級に對する新興勞働階級の要求の下に生れたものである。

第二講 遺傳説の兩派

——ラマルク説とワイズマン説——

一、はしがき

生物學の中で一番厄介な、然し一番興味ある問題の一つは遺傳論である。如何なる生物にも遺傳の事實は見逸がすことは出来ない。手近かな例に我々人間を見ても、親子の間には必ず何處かに似通つた所があり、その容貌、その風姿、その舉動や性癖には、誰が目にも一見親子と見定められる性質の類似がある。が然し、親子が全然同一の型にあると云ふ場合は無く、その間には、必ず大なり小なりの相違がある。同じ親から生れた兄弟姉妹の間でも、矢張り必

ず何處かが異つてゐる。

茲に於て、遺傳の事實のあることは何人も認める所であるが、親なり先祖なりの性質が何の點まで、如何にして遺傳するかは、容易に究めることの出来ぬ問題である。この問題に就いて、從來學者の間に、幾度か激しい論戦が交はされた。而もそれは、何處まで闘つても、遂ひに決着のつくべしとも思へぬところのものである。

實際のところは、どの學者の説にも、相當の眞理が含まれてゐると同時に、また、どの論者の主張にも、等しく滑稽に價する程度の無理と缺點とが、隨所に見出されるのである。

二、ラマルク派の遺傳説

如上述べた所の論争は、大體に於て二派に分れて行はれてゐる。即ち一はラ

マルク派、他は新ダーキン派である。

ラマルク派は、佛國の進化學者ラマルクの所説に立脚するものであつて、

(一)生物の環境に起る一切の變化は、その生物の上に新たなる必要を喚び起す
(二)此等の新たなる必要の結果、生物は更らに新たなる習癖を得て、若干の古
き習癖を棄てる。而して此等の新必要新習癖は、その生物の身體に新たなる器
官を造り出す。(三)器官の發達又は萎縮消失は、使用若しくは不使用に起因す
るものである。(四)一生物の生涯中に生ずる、使用又は不使用の結果は、遺傳
に依つてその子孫に傳へられる。と云ふラマルクの(勿論これは概括せる彼れ
の學説の要項であるが)進化説に歸せられてゐるのである。

これに據れば、ダーキンの所謂自然淘汰なるものは、生物進化の根本原因と
はならないのであつて、自然淘汰の行はれる以前、すでにその器官の使用又は
不使用に依る變化が生じてゐる。その變化が遺傳に依つて、子々孫々に傳承し

累積して、茲に始めて進化が行はれることになる。が、茲に等しくラマルク説
を祖述する學者の中に、右の如き器官の使用不使用に依る變化の外、更に自然
淘汰に依る變化をも是認する一派がある。これはラマルク説とダーキン説との
折衷であつて、謂ゆる新ラマルク派と稱するものが夫れである。然しながら、
正統ラマルク派に於ても新ラマルク派に於ても、一生物がその生涯中に取得す
るところの性質の遺傳を認める點は少しも異なる所がない。

三、死ぬ生物と死なぬ生物

この新舊ラマルク説に對して、猛烈なる攻撃の矢を放つたものは新ダーキン
派である。彼等は、生物がその生涯中に獲得する性質の遺傳を絶對に否認し、
且つダーキンの自然淘汰説は、器官の使用不使用に依る變化の原則を無用なら
しめると説くものであつて、この派の頭目をワイズマンとなす。

ワイズマンは一八八三年、獨逸フライブルク大學長となり、同年六月その講堂に於いて『遺傳論』と題する就任講演を試みた。この講演は、爾後十數年間に亘り、歐洲學界に於ける大激論の火蓋を切つたものであつて、當時或る學者は、これによつて惹起された學界の混亂を形容し、『彼等交戦學者は、さながら激し狂つた鳥賊が、自らの吹き出した墨の中を馳け廻つてゐる如くである』と云つた。

ワイズマンはこれより先き、一八八一年、ザルツブルグに於ける獨逸自然科學者協會の席上で、『生命の繼續』と題する一講演を試みた。後ち一八八三年、彼れは更に之れを敷衍して『生と死』といふ大講演を公けにした。遺傳問題に關する彼れの所説は、先きの就任講演よりも、寧ろこの二講演の中にヨリよく現はれてゐる。この二講演は、單にワイズマン説の根本を示すのみではなく、實に遺傳問題の上に一大光明を投じたものである。

元來、これ等の講演は、生物の死に關する問題を取扱ふのが目的であつた。當時、學者の大多數は、死の原因を有機的環境の影響に求めた。即ち生物の生命は、その有機的境遇の力に依つて徐々に消耗し、遂に全く枯死するに至るものとした。これに對して、ヨハンネス・ムラーは既に一八四〇年の頃、『若し果してこの説の如くんば、生物の個體は生存の當初に於いて、絶えずその有機力を減損すべき理ではないか』との反對論を提出した。成るほど生物の身體は周圍の影響に依つて消耗する。然し乍ら如何にそれが消耗しても、或る段階に至るまでその體力は減損しないで、却つて益々増大する。之れは如何なる生物にも通有の現象である。ムラーは説き來ること此處に至つて、その論歩を中止した。彼れは當時の局限せられた實驗を以つてして、之れ以上に論歩を進めることは出来なかつたのである。彼れの狙ひに狂ひはなかつた。ワイズマンは實にこの放擲された緒を拾ひあげて、その到達すべき最終の標的まで解き延ばした

第一人者である。

彼れは先づ諸生物の生殖法を検討した。生物の生殖法はこれを大別して、有性無性の二つとすることが出来る。無性生殖はアミイバ、モネラの如き單細胞生物に行はれるものであつて、ヘッケルの分類に依れば、それには分裂、出芽胞子の三方法がある。けれども、ワイズマン説に直接關係するものは、分裂生殖のみであつて、他の二つは其の變態に過ぎぬものである。

分裂生殖は最も單純なる生殖法であつて、アミイバの如き、モネラの如き、單細胞生物が或る程度まで成長すれば、自然にその身體の中央部がくびれ出して、遂にそれが、同じ大きさの二個體に分裂する。而してこの分裂した二個體が、その個體としての成長を遂げた時、夫々また二つに割かれ、永久に斯くの如く分裂して、發育行程を續けて往く。この分裂法、は寔に單純なものであるが、如何なる高等生物と雖も、その身體を組成する細胞はこの分裂法則に依つ

て増大してゆくのである。

ワイズマンがこの分裂生殖について注目したことは、かゝる生殖方法を營む生物には死がないと云ふ一事であつた。勿論、偶然の死はある。然し一定の年齢に達すれば必ず避けられぬと云ふ意味の死はないのである。「生あれば死あり」といふ命題は、少なくとも此等の生物には無意義の原則である。

「我々は既に、單細胞生物に自然の死がないことを指摘した。此等の生物の成長には、死に類した終點がないのであつて、新たな個體の發生は、舊來の個體の死と關聯しては居らない。即ち一個體が分裂して二個體になる。この二個體は全く同一のものであつて、その間に老幼大小の差異がない。斯様にして無数の個體が出現するが、それ等は何づれも自種屬と同年齢のものであり、何づれも分裂に依つて無限に生きのびる可能性を有つてゐる」と、ワイズマンは前記の講演『生と死』の中にこれを繰り返してゐる。

然るに多細胞生物になると、この個體の不死性は全く消滅する。ワイズマン自身の言葉を借りていへば、『多細胞生物に於いても、其生殖は細胞分裂に依つて行はれるが、各細胞には生物個體の全身を生殖する力が無い。多細胞生物の細胞は分化して、生殖細胞(卵又は精蟲)及び身體細胞の二部類を形成する。而して單細胞の不死性は、右の生殖細胞のみに傳はり、身體細胞は死を免れることが出来ぬのである。然るに多細胞生物個體の全身の大部分は、この身體細胞に依つて組織されてゐるので、個體それ自身も亦死を免れ得ないことになる。』

されば死が此世に生じたのは、『創生記』に謂ふ『罪』の結果ではなく、實に男女兩性の發生に起因するものである。この場合にも、不死は依然殘されてゐるが、それは意識ある個體の不死ではなく、その個體の生殖を掌る單細胞の不死である。

四、遺傳を掌る細胞

ワイズマンに依れば、高等生物の全身は、身體細胞生殖細胞の二部類から成り立つてゐる。而してこの後者たる生殖細胞は、胚種原形質を以つて充たされた電池の如きもので、雄性の生殖細胞に包まれてゐる此原形質の一小部分が、雌性のそれと混一合體して、茲に新個體が造られる。然しその合體した雌雄胚種原形質の全部が、新個體の身體組織のために消費されるわけではなく、一部分は新個體の生殖細胞内に包著されて、新たにその生殖作用を掌る。斯くして生物の胚種原形質は、子々孫々永續して中斷することがないのである。これ即ち、彼れの有名なる『胚種原形質繼續説』であつて、彼れはこの假定に基き、遺傳はたゞこの胚種原形質に依つてのみ行はれること、随つて身體細胞に生ずる變化は絶對に遺傳せざることを力説した。

これより先、ダーキンは、『全身生殖』と稱する遺傳論を提唱した。この説に依れば、生物の身體細胞は、各微細なる副細胞（ダーキンはこれを毛芽と呼んだ）を派生する。而して此等の副細胞は、或る微妙なる作用に依つて、その生物の生殖器の内に集中し包蓄される。遺傳は此『包蓄された毛芽』に依つて行はれるものであり、随つて此説に依れば、生物の身體に生ずる變化はすべて遺傳すべきものであつて、ラマルク説にとつては非常に有利な假定となるが、ワイズマン説とは到底一致せざるところのものである。

五、兩派の噛み合ひ

一方新ラマルク派は、ダーキンのこの説に對し、ダーキン説は、變化を假定するのみでその起原を説明しない。自然淘汰では適者生存の理を説明することは出来るが、適者の起原そのものを説明することは出来ぬ。淘汰の行はれる以前に於いて、既に變化が無ければならぬ。然らばこの變化は何に起因するかと。ワイズマンはこれに答へて言ふ。『變化は二つの全く異なる胚種原形質が、受精に依つて混一合體する結果である。この合體に依つて、兩者と總べての點に於ては同一でない、又同一であり得ない、新個體が生ずるからである』と。

これに對して、新ラマルク派は更らに追究を重ねる。若し總ての變化が先天的の性質に依つてのみ、即ち兩性生殖に基く雌雄兩胚種原形質の合體に依つてのみ可能だとすれば、かゝる合體の行はれぬ單細胞生物には、變化が生じない譯ではないかと。

この追究はワイズマンにとつては確に手痛き一本であつた。彼れは狼狽しながら言ふ。單細胞生物に對しては確かにラマルク説が妥當である。けれどもこれには相當の理由がある。元來、單細胞生物に於いては、或る特殊の細胞が子孫に傳はるのではなく、個體の全部が永續するのである。随つて一個體の獲得

した性質は、全部個體と共に保存されることになるのである。

斯くて問題は、結局多細胞生物に局限されることになる。多細胞生物の個體は、その生涯の間に獲得した性質及び特徴を果して子孫に遺傳するか何うか。新ラマルク派は、然りと答へ、ワイズマンは、斷じて然らずと答へる。

六、『習得性』の遺傳有無

茲で一言、この論争の中心問題たる『習得したる性質』の意義を明かにして置く必要がある。

此處に一人の人間が一千坪の土地を其の子に遺傳したとする。然るにこの遺産を受けた子が、更らに自分の息子に同じ一千坪を遺傳したとすれば、これは親ゆづりの先天的性質であつて、『習得したる性質』ではない。けれども、此譲り受けた男が、彼れの一生涯に其の地所を増大して二千坪にしたとすれば、

後に加へられたる一千坪は、即ち『習得したる性質』である。

勿論、土地の場合に於いては、その力倆如何に依つて、取得したる一千坪を傳來の一千坪とともに其の子孫に傳へることは出来やう。然し乍ら、生物學的方面に於ては、それは絶對に不可能であると、ワイズマンは主張する。彼れはこの不可能なる所以を説明するために、幾多の興味ある實例を擧げてゐる。

七、足の小指と駱駝の隆肉

例へばスベンサーは、文明人の足の小指が特に小さいのは、永く靴を穿いた結果であると説く。然し先祖代々靴を穿いたことのない未開人でも、矢張り其の足の小指が特に小さい所を見ると、これは靴を穿くと云ふ習慣に依つて『習得されたる性質』の遺傳に基くものではないことが判る。

又、ロンブローは、駱駝の背の隆肉を説明してこれは駱駝が荷物を運搬さ

せられることに依つて、『習得したる性質』が遺傳に依つて蓄積した結果であると云つた。駱駝と駱馬とは多くの點に於いて酷似してゐるが、駱馬には隆肉が無い。そこでロンブロッソは云ふ、駱駝はもと駱馬であつたもので荷物を運搬する習慣に依つて、次第に其の隆肉を得たのであると。彼れは又ホツテントツト種族の女の腰に大きな硬肉の出來たのは、其の子を背負ふ習慣から來たものと断定した。ところが其の後、地質學上の發見に依れば、人間の現はれる以前に於いて、既に駱駝の生存してゐた事實が明かになつた。此の一發見で、ロンブロッソの隆肉由來説は、無殘にも打ち壞はされて終つた。

八、尾の無い猫

これに就いて面白い問題は、一代に受けた傷が遺傳するか何うかと云ふことである。若し生物の個體が一生の間に受けた傷が遺傳すると云ふことになる

すれば、ワイズマン説はこれに依つて美事打破されなければならぬ。

此の問題に就いて、一八八七年、キーズバーデンに開かれた獨逸自然科學者協會の會合に、端なくも大論戰が惹起された。當時、新ラマルク派のツアハリヤス博士は頻りに傷の遺傳可能説を高唱した。博士は其の例證として、席上に携へて來た數疋の尾の無い猫を示して、此等の猫の母親は、元來長い尾を所有して居たものであるが、或る時荷車に轢かれて尾を失つた。丁度其の頃妊んで出來たのが此等の子猫である。と云つてワイズマンに回答を促した。

ワイズマンはこれに答へて、右の車に轢かれたと云ふ事實の詳細が不明である以上、論者の主張に十分の尊敬を拂ふ譯にはゆかぬ。且つ又、件の子猫に尾の無い譯は、其の母の負傷よりも、寧ろ其の父方に尾の無い血統がある故であらう、と主張した。然して彼れは、これに就いて更らに語を續けて曰く——

「友人シヨットリウス教授が、嘗て尾の無い猫を持つて來た。彼れの語る所

に依れば、この猫はシュワルツワルド(獨逸ライン河東方の森林地帯)南隅の小都市ワルドキルヒに見出されたものであつて、これに關して種々取り調べた結果、いつの頃からかワルドキルヒに時々尾の無い猫の生れることが判明した。これに依つて更らに此現象を精査したところ、次の事實が明かにされた。

ワルドキルヒに一人の牧師が住んでゐた。彼れの妻は、もとイギリス人でマシ島(愛蘭と英蘭との間にある小島)産の尾の無い牡猫を飼養してゐた。此の事實から推して、其の後ワルドキルヒに生れた尾の無い猫は、結局みな此の牡猫の血統をひいたものではないかと云ふことになつた。元來、マシ島産牡猫は尾の無いのが特色であつて、それがシュワルツワルドに潜入した點から看ると、他の地方にも、何かの機會でこれと同じやうな事が行はれたに違ひない。』

ワイズマンは其翌年、同じ問題に就いて更らに次の如く論じてゐる。『自分の身體に傷をつけることが、多くの民族の間に昔から行はれてゐる。即ち猶太人

には割禮の習慣がある。支那の婦人は纏足する。其の他前歯を抜いたり、唇や鼻に穴をあけたりする習慣が行はれてゐるが、さうした民族の間に生れた子供が、生れながらにして此等の傷の痕跡でも示したといふ話を聞いたことがな

517。

九、ワイズマン勝つ

以上ワイズマンの遺傳説には、我々から云つても頗る都合よく造り上げたやうな節々も見えるが、然し大體に於いて反對派の論據を突くに有力であつたことは争はれない。少なくともラマルク系の遺傳説に對して、比較的勝味の多いことは事實である。これに就いては、ワイズマンの論敵たるヘツケル派の學者の中にも、幾分か此の事實を認めたものさへある。例へばヘツケルの『創造史』を英譯したランケスターは、其譯書の序文中に『私は茲に言明しなければ

ならぬ。私はヘッケルの分類法の大部分及び彼れが其の取得性遺傳を認めたる張の點については、到底彼れと一致することは出来ぬ。兎に角本書の簡單なる説明によつて此等の問題に興味を感じた讀者は、ヘッケル教授の斷定を終極的のものとするとなしに、直接ワイズマン其他の學者の著述について研究する所がなければならぬ』と言つてゐる。

十、ワイズマン説と社會問題

我々は最後に、社會主義と遺傳問題との關係に一瞥を下さねばならぬ。

社會主義は貧困の根絶を目的とする。然しながら貧困の根絶は、それ自體が最終の目的ではなく、健全なる國民を造るための手段であることは言ふまでもない。過度の貧困が人間の心身を如何に萎縮せしめるかは、喋々を要しないところであるが、假りに長い間、貧困の境涯から受けた心身の萎縮が、かの新ラ

マルク派の主張する如く、『習得したる性質』として永久に子孫に遺傳するものとすれば、如何に社會主義を實行して貧富の懸隔を除去したとしても、人類改造の根本目的を達することは容易ではあるまい。

この意味に於て、ワイズマン説は、社會主義の主張にとつて極めて有利である。ワイズマンに依れば、生物が其の生涯に受けた性質は、子孫に遺傳するものでない。これに依つて、貧困といふ境遇に與へられる心身の萎縮不良化は、個人一代の出來事に止まる。即ち境遇の變化に依つて、如何様にもこれを改善することが出来るのである。

ローマネスは、ワイズマン説の結論に反對したが、然し其の社會的應用の効果は認めてゐた。彼れは『若しワイズマン説が眞理であるとすれば、從來の社會學は、全く書き變へられなければならぬ』と言つて、『ワイズマンに依つて社會主義論究の新局面が開かれた』と主張した或る學者の説に裏書してゐる。

更らに社會學的方面から、ワイズマンと同一の結論に達した學者もある。例へば米國のジョン・アール・コンモンヌ教授は、多年の實地的研究に依つて、次の統計を得た。

合衆國の人民中一・七五パーセントは、先天的の不具者、三・二五パーセントは後天的の不具者である。また二パーセントは生れながらに超凡の天才を有し、如何なる境遇の下にも、其の天分を發揮し得るものであるが、二パーセントは反對に、先天的に水準以下の人間である。而して残りの九一パーセントは、生れつき十人並みの才能を有する人々で、彼等の將來に於ける善悪賢愚は全く其の最初の十五年間における境遇の如何に懸るものであると。

ハーマン・ホイッツテーカー氏は、八年間に亘り、倫敦の貧民窟から加奈太植民地に送られた少年二千名に就いて研究した結果、彼等の多數は懲治監に服役したことがある悪少年であつたに拘はらず、従前の悪習に復歸したものは、僅

か一パーセントにも達しなかつたことを見出した。

要するに、今日社會に見られる諸種の悪徳や犯罪の多くは、人の境遇の所産であるから、境遇の改善は人類向上の最大急務であると云ふことになり、而してこの結論は、後天的境遇に基く性質の變化が遺傳しないといふ、生物學的原則に負ふ所が多いのである。

第三講 競争と協同

—クロボトキンの相互扶助論—

一、進化論史上の五人

ラマルクは、一貫せる科學的方法に依つて進化論を説明せる最初の學者であつた。次にダーキンは『有機體の進化を支配する大原則』たる自然淘汰の原理を發見し、續いてワイズマンは、適當なる者がいかにして生ずるかと云ふ問題に就いての通説を排し、代ふるに彼自身の新説——尙未だ當否未決定に屬する所の——を以てした。デ・フラーは新種の發生は微細なる變化の漸次的集積に依るか、然らずして急激なる飛躍——ミニューション——に依るかとの疑問を起し、

月見草の實驗に依つて突變説を論證するに至つた。

然るに今やクロボトキンは『何者が適者たるか』との問題を携へて出現した。生存を助長する所の適性を構成するものは抑々何ぞ？適者とは生存競争場裡に於て他の生物に對し絶えず剿絶戰を行つてゐる生物の事であるか？それともまた、一切のものの共同生存を維持せんがため相互協力する生物の事であるか？——と。

二、『自然の状態』

この問題が提起されると共に、科學上の思想は階級的利害に依つて影響されるといふ、顯著なる事例がまたも曝露されることゝなつた。由來、自己の解放と信ずる所の目的に向つて、奮闘しつゝある如何なる階級も、その當證と先例とを過去に求むるは周知の事實である。

ランニイメードに於て國王ジョンより強取した大憲章は近世的自由の基礎であるとは、英語國民の間に行はれる見解である。

封建的君主政治を顛覆すべく奮闘した佛蘭西のブルジョアは、専制君主政治は『自然の状態』に背反するものであると主張し、斯かる自然の状態に、自己の立場の當證を求めたのである。斯くてルソアの如き學者は、自然は比較的完全のものであると稱へてこれを理想化し、『自然権』の恢復は自由にとつて缺くべからざる條件あると宣言するにいたつた。然るにこの同じブルジョアが勝利を博して自ら権力者の地位に臨むや、自由の増進を計らず、種々なる點に於いて却つて多數民衆の墮落を助長した。即ち『自然の状態』に就いてのブルジョアの思想は、茲に急激な一變化を遂げたのである。而も斯くの如きは決して佛蘭西のみに限られた現象でなく、ブルジョアが勝利を博した如何なる國に於いても見受けられる所である。

扱て、謂ふ所の『自然の状態』とは、不斷の屠殺を意味するものであつた。自然は『齒と爪との血塗れ状態』であると見られたのである。而して斯くの如き凄慘の甚たる自然状態は、勞働の搾取を助長し、人類歴史に對する最も忌はしき汚辱たる、幼者の虐待を奨励するものと考へられた。此の渦巻きは極めて強く、ハックスレーさへも夫れに捲き込まれた程であつた。尤もハックスレーは自然に就いては鬭争の見解を持してゐたが、ハーバート・スペンサーの如き資本制度擁護論者が自然から推して辯護しようとした社會的殘虐には反對した。後年、スペンサーは或る程度までその動物界に就ての前提を放棄したが、然し不思議なことには、これをその儘原始人類に應用したのである。

三、ダーキンとクロボトキン

自然界には『暗黒と殘虐との充滿せる外に何も無く』、ホッブスの言つた如

く、唯「各人に對する各人の戦争」あるのみと觀じたる右の如き見解を支持せんが爲に、ダーキンの偉大なる權威が呼び求められた。實際の所、ダーキンは此の説に對して殆ど全責任を有するもの、如く思はれてゐた。クロボトキンが此の説を顛覆した事實を見て、知識なき人々は、これまたダーキン説が第十九世紀の最後の四分の一期中に受けたと考へられてゐる「致命的打撃」の一に等しきものと宣言した。

然しクロボトキンはその緒論に於いて、相互扶助の思想は「事實上、ダーキンが其著人類の由來中に言ひ表はした思想を更に展開せるものに外ならぬ」と言明してゐる。ダーキンは曰く「同情心ある成員を最も多く包含せる社會は最も繁榮し、最も多く子孫を蕃殖するであらう」と。勿論クロボトキンは、ダーキンがこの思想を充分展開せず、生存上の「競争」といふ思想を餘りに強調せる嫌あることを述べてゐる。而して此誤謬は彼れの學徒によつて更に助長され

たと言つてゐる。即ち「ダーキンの説も亦、人類間の問題に何等かの關係ある他の諸學説に就いて常に見受けられる所と同じ運命に遭遇した。彼れの學徒は自身の暗示に基いて此の説を展開せずに、寧ろこれを尙一層狭ばめてしまつたのである」と。

クロボトキンがダーキンの相互競争説を否定するものと考へるのは間違であつて、クロボトキンは寧ろ次の如く言つてゐる。

「この二つの主潮を分析せざる間は、進化に關はる如何なる評論も完全なるを得ない——これ等の兩勢力間の闘争は、事實に於いて歴史の本質をなすものである」と。クロボトキンは競争の原理なるものが「何時とも知れぬ古代から既に分析され、叙述され、嘆美されてゐた」事實を指摘し、「實際、今日に至る迄、史詩家や、編年史家や、歴史家や、社會學者などの注意を受けたものは單に此の思潮のみである」と主張することに依つて、彼れの著書は相互扶助の原

理のみを強調するものではないかと云ふ反對論に對する豫防線を張つてゐる。彼れの著書の實體となるものは、無脊椎動物より最高級哺乳動物に至る迄、また第一石器時代より二十世紀に至るまで、生物界到る所に相互扶助は存するといふ幾多の實證の蒐集である。此の書は前後八章より成り、最初の二章は『動物間に於ける相互扶助』を取扱つて居る。

四、動物界の相互扶助

この最初の二章に依つて、社會は人類から始まつたと云ふ説は全く覆へされてしまつた。普通蟻や蜜蜂にのみ限られてゐるものゝやうに信ぜられてゐる複雑な社會的配劑は、如何なる生物に於いても、殊に鳥類に於いては最も著しく、繁榮してゐると云ふ事實が示されてゐる。

鸚鵡の相互扶助は著しきもので、クロボトキンは『鸚鵡の知識の發達に鑑み、

これをあらゆる鳥類の絶頂に据えてゐた程である。濠洲の白鸚鵡は穀物を襲ふに當り、その妨げとなる『一切の障碍を無効に歸せしめる』程さかしく互に扶助し合ふのである。『彼等は穀畑を襲ふ前に先づ偵察隊を派遣する。此の偵察隊は畑の附近にある一番高い樹に陣取り、他の斥候等は、畑と森との中間にある樹に止まり、信號の中継ぎをなす。』『大丈夫との報が傳はると、二十羽ばかりの白鸚鵡は全隊伍から離れて空中を飛翔し、それから畑に最も近い樹を目掛けて飛んでゆく。彼等はまた久しく附近の様子を偵察した後、始めて全隊行進の相圖を與へる。すると全隊は一齊に立ち、瞬く間に畑を襲ふのである。』

ペリカンの間に行はれる相互扶助は、極めて著しいものである。『彼等は常に大勢隊を組んで漁に出かける。そして適當の入江を選んでから濱邊に向つて半圓を書き、濱邊を指して泳ぎ乍らその半圓を狭めて行き、偶々半圓内に包まれた魚を残らず捕へてしまふ。狭い河や運河などの場合には、彼等は二隊に分

れ、各隊は矢張り半圓を畫き、双方から羽叩きしつつ接近してゆく。これは恰度、二隊に分れて長い網を引き乍ら進み、出會つた時、網の中に入った魚を残らず捕つてしまふのと同じである。』

お馴染の雀も亦見逃されてをらぬ。雀は古代の希臘人でさへ認めてゐた程、著しく相互扶助を慣行せるものと言はれてゐる。クロボトキンは希臘の雄辯家が『予の演説中、一羽の雀が飛んで来て、一人の奴隸が穀物袋を床の上に落した事を他の雀たちに告げ知らせた。すると皆んな其處へ穀物を喰ひに飛んで行つた』と語つたと云ふ話を掲げてゐる。雀も亦社會的訓練を有するもので、『若し一羽の怠け雀が、中間の雀が作りかけてゐる巢を我物にしようとし、または其の巢から數本の葉を盗むかすると、大勢の雀は其怠け雀に干渉をする。』クロボトキンは、絶えず互ひに咽喉輪を目がけて飛びかゝると想像されてゐる野獸の間にも、大なる慈悲と同情とが行はれると云ふ事實に就いての幾多研究家の

信憑すべき觀察を掲げてゐる。即ちゼ・シイ・ワードは『負傷せる仲間を起して伴れ行く鼯鼠』に就いて語り、ブレイムは『數週前に負傷した一羽の鳥を木のウツロの中で二羽の鳥が養つてゐるのを見た』と言つてゐる。又ダーキンの引用せる所に依れば、キャピテン・スタンスベリーはウターへの旅行の途次『一羽の盲ペリカンの爲めに、他のペリカンたちは三十哩の遠方から魚を取つて来てこれを養つた——而も極めて善く——』と云ふ事實を見た。

此の種の澤山の事例に依つて、クロボトキンは次の如く結論してゐる。『有機界を通じて行はれる生存競争なる觀念は現世紀に於ける最大の概括であり、而して此の競争は、生物が不利なる事情と戦ふ場合には屢々集会的のものになると云ふ事實は、如何なる自然科学者と雖もこれを疑はぬであらう。』

五、新種の發生

クロボトキンは、動物に就いての考察を結ぶに當り、個體間に於ける命がけの競争に依らずして新種を發生せしめ、または舊種を消滅せしむる様々の方法を指摘することに依つて、自己の立場を非常に強めてゐる。「例へば栗鼠は落葉松の森に松毬が逼迫して來ると樅の林に移住する。そして斯くの如き食物の變化に依つて、栗鼠は人の良く知る一定の著しき生理的影響を受けるものである。若しこの習慣變化が永續せず、翌年に至り、陰暗き落葉松の森に再び松毬が多く出來る様になるとすれば、斯かる原因に依り栗鼠の何等新しき變種も生じない事は明かである。けれども、若し栗鼠の棲息する廣大なる領域の一部に物理的變化が生じ——例へば氣候が温暖になるか、又は乾燥して來る結果（此等の變化は、何づれも落葉松の森に比べて松林を増加せしむるものである）而して一方、栗鼠をして乾燥せる方面に棲息せしむる他の何等かの條件が生ずるとすれば、茲に初めて栗鼠の新變種、換言すれば、栗鼠の初發的新種が生ずる

ことゝなるであらう。而して此のヨリ良く順應せる新變種の大部分は、年々存續し、其中繼個體はマルサス流の競争者によつて餓死せしめられることなく、時経る間に漸次死滅することゝなるであらう。』

また、『冬中トランスバイカリアの草原で草を食んでゐる馬や牛に就いて見ると、彼等は冬の末になると著しく瘦せ衰へて來る。然しながらこれは、彼等すべてに取つて、食物が充分でない結果ではなく——薄雪の下に埋もれてゐる草は至る所豊富であるから——雪を掻き分けて草を採る事が困難な結果である。而してこの困難は、總べての馬匹を通じて同一なるものである。……我々は斷言することが出来る。——彼等の數は競争に依つて制限されるものではない。彼等は一年中の如何なる時期に於いても、食物の爲めに競争するの必要はない！而も彼等が決して人口過多に近い状態に達し得ないのは、氣候の然らしむる所であつて、競争の結果ではないのである。』

冬の食物を貯える爲に團結し、又は競争の始まる頃になると眠つてしまふ齧齒類、大群をなして大陸を横断し食物豊富なる場所へ移住する水牛、數が夥しく殖ふるに従つて二隊に分れ、老年組は河を下り、壯年組は河を溯り、斯くして競争を避ける海狸——クロボトキンは此の種の例證を澤山に擧げた後、『競争するな。競争は常に種屬にとつて有害である。資源は豊富であるから競争は避けられるのだ。——故に團結せよ！相互扶助を實行せよ！これぞ肉體的にも知識的にも、また道德的にも、生存及び進歩に就いての最大の安全、最良の保證を各個及び全體に附與すべき最も確實な手段となるものである。自然界の命令は斯くの如くである』と宣明してゐる。

三、野蠻人の相互扶助

第三章は『野蠻人の間に於ける相互扶助』を取扱つてゐる。この章に於て我

我は家族なるものは種族に先だつた古代的の制度であるか、それとも民族の結果として遙か後に出現したものであるかとの問題に逢着する。クロボトキンはモルガンや、バシヨフエンや、メーンや、ラボツクや、テイラー等の主張せる説を採り、シユタルケやウエスターマーク等の提唱した説を排斥してゐる。

人類學上の研究に依る野蠻人は、俗説に信ぜられてゐる所の血に渴した怪物の如きものとは餘程違つてゐる。『野蠻人が時として食人種たることあるは事實である。然しそれは決して屢々行はれる事實ではなく、且つ又經濟上の必要と密接に關聯せるもので食物が豊富になると廢されてしまふ。』老人を森に捨て、死に至らしむる習慣は、成る程悪いには違ひない。然しながらこれと普通通信せられてゐるほど悪いものではないのである。野蠻人は、その移住に際して、老人が自ら足手纏ひとなることを厭ひ一層の事殺して欲しいと願ふ迄は、何處までも一緒に仲れて行くのである。老人が斯く願つた時、分け前以上の食

物を與へられて森の中に捨て去られる。誰も彼を殺す氣はないからである。生
 兒殺しの風習も同じ動機から來たもので、野蠻人は出生率を低減せしむるため
 あらゆる手段を採るのである。彼等は小供を残らず養育する事が出來ないの
 だ。然し此の風習も食物の豊富なる時は消えてしまふのである。此の習慣が極
 めて忌むべき性質を帯びるやうになつたのは、其の必要が全く無くなつた後、
 宗教的後光に封じ込まれ、神聖なる儀式として保存されるに至つた時である。

野蠻人は復讐を善事と信じてゐた。然しそれは罪過に依つて嚴密に測定せら
 るべきであつた。即ち目にて目を償ひ、齒にて齒を償ふ底のものでなければな
 らぬ。齒にて目を償ひ目にて齒を償ふ底のものであつてはならぬ。野蠻人はた
 だ敵を殺すだけで自種族の者は常に全力を盡してこれを防禦した。『種族内に
 於いては如何なるものも共同に分與される。少し許りの食物も居合せてゐる總
 ての人々に分配される。そして野蠻人はたゞ獨りで森の中に居る場合、自分の

聲の聞える總ての人々に向つて三度び高聲で食を共にせんことを誘はないうち
 は決して食事を始めないのである。』『彼れにして若し種族内に行はれる些細な
 規則の一でも侵害することがあれば、婦人の嘲弄を受ける。』『隣人の領域に
 入る場合には、高聲で自己の來たつた事を知らせ、此の家に入る場合には、入
 口に自分の斧を立かけておかねばならぬ。獲物を分配する場合、一人が貪婪を
 示せば、他の凡べての人々は自分の分前をも提供して彼れに恥辱を與へる。』罵
 言嘲笑は彼等の大いに嫌ふところである。彼等の小供は口論好きではなく、滅
 多に争はないのである。精々言ひ得るところは、『お前のお母さんはお針を知
 らぬ』とか『お前のお父さんは目ツからだ』位の惡口にすぎない。

野蠻人は己の利益と種族全體の利益とを同一視してゐる。彼等は個人主義者
 ではない。而して如何なる場合にも、兒童に勞働をさせることは承知しないで
 あらう。

七、未開人の相互扶助

第四章は未開人を取扱つてゐるが、此の未開人の時代に於て、我々は愈々有史時代に入るのである。此時代には一見相互扶助なるものは存在して居らぬやうに見える。戦争と流血との外には何物も無いかに見える。然し乍らその理由は求むるに難くない。即ち最近に至るまで、我々は専ら『太鼓と喇叭の歴史』を歴史家から饗應されて居たのである。『彼等は各種の戦役、各種の大戦小戦や、各種の奮闘暴行や、各種の個人的苦難に就いての細録を子孫に遺した。然し我々が誰れも自分の経験に依つて知る無数の相互扶助的及獻身的行爲に就いては何等の記録も與へないのである。』——古代の編年史家は、同時代の人々を憐れした些細な戦争や災厄を書き洩らすやうなことはなかつたが、多数民衆の生活に就ては何等注意するところがなかつた。而もこれ等の民衆は、小數の人

々が戦争に没頭しつゝある間、平和の裡に苦役するを常としたのである』

サー・ヘンリー・メーンは其著『國際法の起源』に於いて、『人類は何等それを防止すべき努力をせずして戦争の如き凶惡事に従ふ程、爾く殘忍迂愚たりし事はなかつた』と云ふことを充分に論證した。彼れは又『戦争を防止し若しくは夫れに代るべき何物かを備へんとせる意圖を徵表する所の古代的制度』が、如何に絶大であるかをも示してゐる。

クロボトキンは、羅馬帝國の壊滅を招致した、かの民族大移動の原因に就いて、含蓄ある暗示を與へてゐる。『それは乾燥作用である。従前に於いて認められなかつた速度を以つて今尙繼續しつゝある全く最近の乾燥作用である。これに對しては人類は無力であつた。西北蒙古及び東部土耳其斯坦の住民達は水が漸次なくなりつゝある事を知つた時、低地に通ずる廣き谷間を下り、平原の住民を西方に逐ひやるの外、取るべき道はなかつた。』かくて彼等に就き記録

されてゐる。大戦争は、絶對的なる物理的必然によつて彼等に強要されたものである。

未開人等の間には何等の社會問題もなかつた。これ、近世個人主義の基礎たり近世文明に伴ふ墮落と貧困との源泉たる生活資料の私有なるものが、未開人等の間には知られて居なかつた結果である。彼等は共產者であつた。一人の利害は萬人の懸念するところであつた。何物も消費の點に達する迄は私有されなかつた。そしてこの點に達した時と雖も、必ずしも私有されるとは限らなかつた。食物は一般に共同消費されてゐたからである。この社會的形態は、今尙とり分け露西亞に保存されてゐる。クロボトキンは言ふ。「露西亞の共產村落に於て牧場の草刈をする（男は手に手に大鎌を持つて先きを争ひ、女は草を引くり返して積みあげながら）光景は、これ實に人類の勞作は如何なる物たるを得、又如何なる物たらざるべからざるかを示すものである。この場合乾草は個々の

家に分配される。そして何人と雖も、許可なくして隣人の堆草を取るの權利なきことは明かである。殊にコーカシアのオツシート人の間に行はれる此の最後の規則は、最も注目すべきものである。郭公が鳴いて春の到來を知らせ、牧場は間もなく又若草に蔽はるべきことを告げ知らせると、乾草なき者は誰でも隣人の堆草から家畜用の乾草を取る權利がある。斯様にして古き共產的權利は回復される。これ恰も、無制限なる個人主義が如何ばかり人間性に反するかを立證せんとするものゝ如くである。』

初期の基督教徒は「總べての物を俱にし」たが、然しそれは近世社會主義に向つて進みつゝあるものではなかつた。彼等は寧ろ、幾萬年に亘つて人類の子女に歡喜と充實とを與へた原始共產制に逆戻りしてゐたのである。未開期に於けるこれ等の共產者は、徹底的民主主義者であつた。彼等の民會には、何人も出席して發言することが出來た。此の民會は、實に彼等有する唯一の政府ら

しきものであつて、その決議は、これを勵行すべき何等の役人をも要せざる程充分に尊敬されてゐたのである。彼等は又單に小供の勞働を排斥する點に於てのみでなく、又小供の毆打を排斥する點に於ても我々に優つてゐた。

八、近世に於ける相互扶助

『中世都市に於ける相互扶助』を論究せる二章は、中世に於ける相互扶助の主たる代表としてギルドを取扱つてゐる。集權的國家の蠶蝕に對する、自由都市の抗爭に就いての稍詳細なる叙述が掲げられてゐる。中世の都市は結局敗滅に歸し、ギルドは破壊された。けれども破壊し難き相互扶助の原理は新らたなる形態を採り、新たな事情に適合してゆくのである。

茲に於いて問題は、結末の二章たる『我々自身の間における相互扶助』に移るのである。その最初の章の殆ど全部は、露西亞、瑞西、佛蘭及獨逸の村落に今

尙存續する相互扶助的な習慣と制度とを叙述する爲に作られて居り、最後の章は、相互扶助に就いての眞に近世的なる諸例を取扱つて居る。それ等のうち最も重要なるものは、勞働組合並びに其罷業及び消費組合、救助船協會、慈善團體等である。

勞働組合のすぐ次に掲げられて居る相互扶助の例解は即ち社會主義運動である。クロポトキンは、次の如き文章を以て、現社會に於ける相互扶助の一表現としての社會主義運動に對する彼れの見解を述べてゐる。

『政治上のあらゆる大運動が、大規模にして且つ屢々遠き將來に横る問題の爲に戦はれたものであり、而してこれ等の運動中最も私心を交へざる情熱を喚起せるものが最も有力であつたと云ふ事實は、すべての經驗ある政治家の知るところである。歴史上のあらゆる運動は此の性質を有するものであつた。而して現代に於て此例に當嵌るものは即ち社會主義運動である。』『金で雇はれた娼

動家とは、社會主義運動に就いて知る所なき人々の好んで用ゐる反覆語である事は疑を容れない。だが事實はかうである。私は自分の親しく知つた事實だけに就いて云ふのであるが、若し私が過去二十四年間の經驗を日記に書き留めておいたとすれば、斯様な日記を読む人は絶えず勇壯といふ言葉をその唇頭に泛べたであらう。とは云ふもの、此の日記に書き留めらるべき人物は決して英雄ではない。それは、偉大なる思想に氣化された普通人なのである。如何なる社會主義新聞も——歐羅巴だけでも幾百と云ふ數に達してゐる——何等報酬上の希望なく、また多くの場合個人的野心すらもなく、多年に亘つて同じ犠牲の歴史を有して居る。社會主義者の家族にして、明日の食物のアテもなく生活しつつあるものを見た。良人は社會主義新聞に關係してゐるために、その小都市の八方からボイコットを喰はされ、妻は針をして一家の糊口を支へてゐる。而も斯様な状態は數年間に亘つて繼續し、結局その家族は一言の不平も云はずた

だ『續けてやれ、我々はもう續かない』と云つたさりで町を去ることゝなるであらう。私は又、肺病で死にかゝつて居り、自分でもそれを承知し乍ら、それでも尙死ぬ數週前迄、雪や霧の中を馳け廻つて、集會の準備をしてゐた人々を見た。彼等はそれから漸く入院するのであつたが、其時の言葉に曰く『さて友よ、もう駄目だ。醫者の話では二三週きり保たないさうだ。同志諸君に何うか見舞に來てくれる様傳へてくれ玉へ。』茲で話したなら『理想化』したのでと云はれさうな事實を私は澤山見てゐる。これ等の人々の名は狭い友達仲間以外には殆んど知られて居らないから、かれ等が死ぬと、聽て忘れられてしまふであらう。實際のところ私は此等少數者の限りなき献身的行爲と、多數者の些細なる献身的行爲の總和と果して何づれをヨリ多く嘆賞していか分らぬのである。社會主義者の賣る各一ペンニ新聞、社會主義者の催す各集會、社會主義者が選舉に贏ち得る各百票——これ等は何づれも局外者には夢にだも知り得ざ

る程の精力と犠牲とを代表せるものである。而して今日社會主義者に依つて爲されて居る事は、過去に於ける政治上宗教上のあらゆる民衆的及び進歩的團體に依つて爲された所である。過去に於ける一切の進歩は、斯かる人々と献身的行爲とによつて進められたものである。

第四講 進化と蕃殖

——マルサス説と收穫遞減の法則——

一、暑中の綿入れ

戦争以來、人口論の局面が一變した。戦争以前に於いては、人口過剰が問題であつたが、戦争以來これが反對の現象を示すに至つた。戦争は人を殺す。人口の減少は國力の疲弊を招來する。如何にして人口の増殖を策せんか。かくて獨逸政府の如きは、戦時中も頻りに一夫多妻を奨励したと傳へられてゐる。

斯かる際に人口過増論者マルサスを話題とするは、些か暑中の綿入れの嫌はあるも、しかし人口減少は決して永久のものではなく、今日の社會組織が存続

する以上、人口過多の問題は必ず何等かの形式に依つて現出するに違ひない。人口論はこれを一つの獨立した學問として觀ても可なり意義豊富な問題であるが、多くの場合それは貧困問題の附録として論究されてゐるにすぎない。貧困は今の社會の附隨物である。貧困は何故に生ずるかと云ふ問ひに對して、それは生活品よりも人口が多過ぎる故である何人も躊躇なく答へるであらう。然らば貧困を絶滅するには、先づ人口制限の必要が起りはせぬかと云ふ議論や或は又貧困は人口過多の結果として已を得ずとなし、貧困を防ぐには、過剰人口を國外に移送する必要上、領土の擴張が緊要であると唱ふる、國家主義、帝國主義の主張も出て來る。

これ等は要するに、人口論そのもの、學理的な研究よりも、寧ろ今の社會組織若しくはそれより生ずる貧困問題に對する興味或は利害關係が先き立つてゐる。こゝに斯くの如き興味なり利害關係なりが存在する以上（換言すれば今日

の社會組織が存続する限り）マルサス説は、眼前は兎もあれ、永き將來の間に又必ず擡頭するに相違ないのである。即ちマルサスを話題に引出した所以である。

二、マルサス説の根本

マルサスの人口論を略言すれば、（一）自然界の一切の生物は（人間も）、常に其の食物範圍以上に増殖せんとする傾向を有してゐる。（二）此の不斷的傾向の結果として、生物は常に其の食物の不足に苦しむ。自然界に種々なる悲慘があり、又人間界に忌むべき貧困罪惡の絶えぬは蓋しこれが爲めである。（三）故に人間社會からこれ等を根絶するには、先づ一家を扶養する資力なき者が、自ら情慾を制し獨身を固守して、斯くの如き人口過多の自然力を防止せねばならぬ、と言ふのである。

右の中、(二)と(三)とは後年新マルサス論の生ずるに及んで、今の社會の貧困罪惡は必ずしも、人口過多のみの結果ではなく、社會組織の缺陷も確かにその一部の原因を成してゐる。又、人口を制限するに制慾や獨身のみを強めるは苛酷であり、それよりも避妊の實行は、むしろヨリ一層自然に、且つ健康に害を及ぼす事なく、而も最も所期の目的に有効である、と著しく修正さるゝに至つた。

然し少なくともその主張の前提、即ち前記の(一)だけは萬古不易と見做されてゐる。これマルサスの名を不朽ならしむる一大真理であるとされてゐるのである。ウエンチヒ教授の如きは、この命題を評して『今日までの經濟學全般に於ける、最も鞏固にして且つ最も重要な自然律』とまで言つた。けれども、この命題を是認する以上は、其の結論たる(二)及び(三)も亦、少なくとも新マルサス論の範圍内に於いて、これを是認せねばならぬ。何故ならば、人口過増

が自然的必然の傾向を有する限り、社會に罪惡や貧困の絶えぬは己むを得ぬことであり、それを根絶するには、勢ひ避妊なり制慾なりに頼るのほか途が無いからである。随つて人口論の研究は、結局前記の(一)に集中されなければならなくなる。

三、生殖と蕃殖

試みに人間以外の生物に就いて考察するに、生物には何人も知る如く總て猛烈なる蕃殖力がある。

象はあらゆる動物の中、蕃殖力の最も少ない動物と言はれてゐるが、それでも其の一生百年間に平均六匹の子を産む。この六匹の子が總て完全に成育したとすれば、最初の雌雄一組から七百四十五年後には、約一千九百萬匹の子孫が生ぜねばならぬ。蕃殖力の最も弱き象にして斯くの如くである。若しそれバク

テリヤの如き微生物にいたらんか、僅か一晝夜にして約一萬倍に蕃殖する力を有してゐる。されば單に生物の蕃殖力といふ點にのみ着目し、それに依つて直ちに生物の事實上の蕃殖を速断すれば、生物の増殖率はマルサスの主張する如く廿五年毎の倍加はあるか、十年一年、甚しきは一分一秒にして、二倍し三倍する生物が如何程あるか知れぬのである。

然しながら生殖は必ずしも蕃殖ではない。多産といふことは、單にそれだけのことで多く殖えるといふことは意味しない。何故ならば第一に、生物が如何ほど多くの子を生んでも、一方に寒氣、降雪、暴風雨、若しくは旱魃、洪水等の自然力があつて、絶えずその幾分を滅殺してゐる。クロボトキンは此自然の破壊力を説明して、これに比較すれば「同一種屬間の競争の如きは、たとひ或る場合には存するとしても、殆んど其勢力は言ふに足らぬ」と言つた。ペーッは或時、羽蟻が其の穴から出發する矢先き、暴風雨に襲はれた爲め流れに吹き

落ちて、死骸が一時から二時の厚さで數哩の間水際に續いて流れるのを目撃したと傳へてゐる。かゝる例は、自然界に於いては決して稀なる現象ではない。

以上は生殖力必らずしも蕃殖力たり得ざる第一の原因であるが、假りに斯かる自然の破壊力が無いとしても、其他に更らに重要な原因があるのである。

元來生物なるものは、一方に食物の需要者であると同時に、他方にはまた其の供給者である。自らは他の生物を食して生命を維持するが、他の生物は又、彼自身を食つてその生存を持續してゐる。故に生物の生殖力が大きいといふことは、その生物を食つて生きてゐる他の生物から言へば、實はその食物の増殖力が大きいといふことになる。

一例を舉ぐれば、年々英國海岸で捕獲される鯨の数は殆んど全世界の人口に匹敵する。然るにこの鯨はまた絶えず微細なる魚類や甲殻蟲を食つて生きゐる

ものであつて、試みに捕獲した鯨の腹を割いてみると、大抵二十乃至三十の甲殻蟲を含んでゐる。今假りに、總ての鯨が毎日平均一匹宛の甲殻蟲を食ひ、半年間生存するものとすれば、英國の漁夫が年々捕獲する鯨の食ひ盡くす甲殻蟲の數は、實に全世界の人口の約百八十倍に相當する。

この事實から觀れば、人間に食はれる鯨よりも、鯨に食はれる甲殻蟲は、遙かに急速に死滅せねばならぬ筈である。而も又一方に於いて、鯨を食ふものは獨り人間ばかりではなく、金鯖の如きは一回に約千匹の鯨を呑む。ベイアード教授の計算に依れば、假りに一匹の金鯖が一日に食する鯨の數を十匹と見積つても、少くとも毎日百億萬匹の鯨が金鯖の餌食となる。更らに同教授は、北米海岸に於いて年々金鯖以外の他の猛魚の餌食となる鯨の數は、少なくとも三萬兆匹に上ることを認めてゐる。

この一例に依つて、一生物の生殖力の大なることは、必ずしもその生物の事

實上の増殖力が強いといふことでなく、實はその生物を食して生きる他生物の食物増殖力がヨリ大なることの證據である所以を了解するであらう。食物需要者が殖えると云ふことは、これを他の一面から觀れば、食物供給者が殖えるといふことである。

そこで、自然界全體に就いていへば、『人口』の増殖と食物の増殖との間には、常に一定の平均が保たれてゐる譯であつて、マルサスの目に自然界に於ける悲惨の大原因として映じた生殖の偉力は、實はそれと正反對に、自然界に於ける一切の生命、一切の生活の根本條件でなければならぬ。

四、人間の食物範圍

然るにこの状態は人間に於いては稍々趣を異にして來る。勿論人間も生物である以上、單に他生物を食して生きてゐるばかりでなく、矢張り自らも亦他生

物の食物となるといふ、自然の法則を免れることは出来ぬ。

たゞ、この法則の働く範圍は、人間に於いては極めて狭く局限されてゐる。例へば人間が猛獸の餌食となる場合は、今日に於ては最早殆んど絶無といつていい程である。人間はまた傳染病に冒される。その傳染病の原因は微菌の襲來である。即ち微菌は人間の身體を餌食とするのである、然しこれとても文明の進歩とともに醫術衛生が完備するに連れて、追々防止せらるべきことを豫想し得られる。

斯くの如く、人間が他生物の餌食となる場合は比較的稀である故、若し人間の食物範圍を固定不動と見れば、人間は結局大規模の飢餓貧困を免れることが出来ぬ筈である。

然るに人間の食物範圍は決して固定不動ではない。人間の數は二十五年毎に倍加するとマルサスは言つてゐるが、人間以外の生物中には、前にもいふ如

く、十年、一年、甚しきは一分、一秒にして倍加するものが無數にある。そして人間はそれ等の生物の或るものを常食として生存するのである。たゞ、人間が求むる生物は、人間以外の他生物中にも亦、これを求むるものが多く、隨つて人間の食物範圍に影響を來たす譯であるが、人間は他生物の有せざる武器即ち知力を以つて自己と同一の食物を要求する他生物を排撃し、自己の食物たるべき生物を勢力範圍内に引き込むことが出来るのである。

前の例で言へば、人間は鯨を食ひ、鯨は又金鯖にも食はれる。若し人間が鯨を獨占せんとすれば、宜しく金鯖を遠けることである。斯くすることに依つて人間の食物範圍は自ら擴大されることになる。現に人間はそれを實行しつつある。即ち魚類の飼養に於いて、産卵期になれば親魚だけを隔離し、生れた卵が他の魚類に食はれることを防ぐが如き、又農業や養蠶に於いて、害虫驅除を慣行するが如き、或は又牧場に於いて猛獸の來襲を防ぐ特殊の設備をなすが如き

皆それである、又或る程度まで自然力の侵害を豫防して、自己の食物の死滅を防ぐことも出来る。更らに人間は、機械を用ひ技術を施して、自己の食物たるべき生物の食物を精選増大し、それに依つて其生物の質量を改善増大することも出来れば、又人為淘汰に依り人間の要求通りに其生物の組織體形を改造することも可能である。

要するに人智の進歩、生産技術の發達は、人間の食物範圍を無限に擴大し得る可能性を有してゐるのである。然しながら如何に生産技術の發達があるとしても、一方に土地の豊度に限定があり、また一定豊度の土地に加へられた労働の生産力に限度あるべきものとすれば、人間の食物範圍は早晚その擴大を停止するの餘儀なきに至るであらう。所謂『收穫遞減の法則』なるものは、この要求に應じ、マルサス説の補足として提供されたところのものである。

五、收穫遞減か收穫激増か

この學說に従へば、元來一定の土地が齎らす收穫分量は、決して其の土地に加へられたる労働量の増加と同一比例を以つて増大するものではない。例へば最初の年、十人の労働者を使役して一定の土地を耕作し、それに依つて百の收穫を得、翌年更に十人を加へて此の土地を耕耘しても收穫の量は決して二百とはならず、更らに其翌年は收穫の増大率が遞減するのである。今これを假りに五年間に見積れば次の如くなる。

	一年目	二年目	三年目	四年目	五年目
労働者數	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇
收穫總量	一〇〇	一八〇	二四〇	二八〇	三〇〇
最後に加へられた労働者の收穫	一〇〇	八〇	六〇	四〇	二〇

そこで一家族を平均五人と見積り、其の一家の生活に必要な一年間の收穫量を假りに五とすれば、次の如くなる。

	一年目	二年目	三年目	四年目	五年目
勞働者數	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇
右勞働者に養はれる家族數	二〇	三六	四八	五四	五八
最後に加へられた十人の勞働者が養ふ家族數	二〇	一六	一二	八	四

即ち人口が増殖するに従つて、その増殖した人口の得る收穫量は減退し、農民が他の人口に提供する過剩收穫の分量もそれに準じて遞減する。最初の年、農民に依つて養はれる非農家族は二十戸であつたが、最後の年に於いては僅かにそれが四戸に減じて来る。即ち人口の増加は、絶對的には食物の増加を齎らすが、相對的には却つて其の減少を來たすといふことになるのである。

この説は後に『限界効用説』と稱して工業方面にも應用された。兎もあれ、この説は『收穫法則の根柢に横はる一大真理』として、經濟學者の讚美の的となつ

てゐる。これが果して『一大真理』であるとするれば、マルサス説も矢張り其の根本に於いて一大真理でなければならぬ。

然るにこの説に就いて先づ疑問とすべきは、それが果して生産技術の發達を前提としての結論であるか、それとも又生産技術を固定と見ての結論であるかといふことである。若し生産技術を固定と見れば、一方に收穫遞減の法則が眞理であると同時に、他方に收穫停止の法則も亦眞理でなければならぬ。

何故ならば、茲に一定の土地があり、それを耕作するに一人の農夫が一挺の鋤(一定の構造の)を用ゐると假定する。此の場合他の一人を加へても、鋤の生産力は殆ど増進しない。尤も此新たに加へられたる農夫が更らに一挺の鋤(同じ構造の)を用ゐれば、その爲に耕耘が増進するといふ利益はあるであらうが然しそれは與へられたる生産條件に於いて耕耘を十分ならしむる爲めに、二挺の鋤を要するといふことを示すに過ぎぬ。二挺で十分の場合に、更らに一挺を

加へれば、加へられたる一斑は全く無駄になる譯で、三挺目の追加労働は、收穫遞減ではなく寧ろ收穫停止の境目である。

兎に角、生産技術を固定と見る限りに於いて、一定の土地から得られる收穫の最大限度に對しては、必らず其の爲に必要な労働量が一定して居る。随つてそれ以上の追加労働は悉く浪費に終はる。

六、收穫激増の法則

生産技術を固定と見る時は以上の如くであるが、反對にそれが發達する場合には、收穫遞減にあらずして收穫激増が行はれるのである。

一例を擧ぐれば、熱帯地方に於いては土地の乾燥甚しきため、如何に人力を用ゐても收穫の得られない場合がある。かゝる際に、この土地に文明的灌水設備その他を利用すれば、單にそれのみで收穫が百倍し、千倍し、且つ支出労働

の分量が著しく節減される。故にこの場合は收穫遞減にあらずして收穫激増である。けれどもこの灌水設備も長い間には結局又、收穫遞減を餘儀なくせしむるものであるが、一方に人智の發達は新たに收穫激増を喚び起す原因となる更らに完全な灌水設備を發明するのである。

斯くの如く、生産技術の發達を不斷と見る限り、收穫遞減は常に收穫激増に打勝たれる。現に世界の如何なる國に於いても、文明の進歩に連れて農民の數は全人口に比し著しく低下してゐる。若し收穫遞減のみが實際行はれるものとするれば、農民に扶養される一般人の數は、農民の數に比して逐年遞減してゆかねばならぬ筈である。

然るに農民遞減の事實は、單に歐洲諸國の如く生活品の輸入を特色とする工業國に於いてのみならず、合衆國の如き生活品輸出國に於いてさへもこれを看取することが出来る。

合衆國の總人口は、一八七〇年に於いて三千九百萬人であつた。その中、都會民は八百萬、即ち全人口の二十一%を占めてゐた。然るに一九〇〇年の統計に依れば、總人口は七千九百萬に上り、都會民の數は優に二千五百萬を超えてゐる。即ち總人口の二十一%から三十五%に増率した。それと同時に小麥の輸出は五千四百萬ブシエルから一億八千六百萬ブシエル、綿花の輸出は三百萬梱から七百萬梱に激増した。

尤も都會民の中で、農具類の製造に従事する勞働者は、此の場合矢張り農民と見做すことが出来るが、それは極めて僅少である。即ち一八七〇年は二萬五千二百四十九名、一九〇〇年は四萬六千五百八十二名、一九〇五年は四萬七千三百九十四名に過ぎぬ。これ等を算入しても、前記三十年間に於ける農民の増加は六%に過ぎぬが、都會民の増加は優に二百十二%を數へてゐる。

また我國の總人口は、明治四十一年には五千二百六十二萬七百一十一人であつ

たが、大正五年には五千七百十九萬九千二百七十七人となり、約八%の増率を示してゐるが、同年間に於ける農民數は五百四十萬八千三百六十三人より五百四十五萬七千七百九十三人に増加し、僅かに一%弱の増率である。而して同年間に於ける米の輸出高は、二十三萬石から六十九萬石に増大した。

七、人口論の社會的背景

以上の説明に依り、マルサスの人口論及びその補足説たる『收穫遞減の法則』が、今日の科學的批判に對して、脆くも倒壊すべき軟弱の學説たることは明かである。然るにも拘はらず、この兩説は今日學界に於いて尙不動の（少くとも其の根柢に於いて）眞理と見做されてゐる。元來マルサス説は、封建制度から資本制度に到る過渡期の社會事情を反映したもので、資本の集中に伴ふ、失業者の増大を自然律に依つて瞞着せんとしたものである。然しながら失業者の増

加が、却つて資本蓄積の動力となることは、一面、封建の舊勢力に囚はれた彼れの頭の中に明哲の理解を喚起しなかつた。彼れは失業者産出の責任が、封建貴族に轉嫁さるべきことを怖れたのである。斯くて彼れは、一面失業者の續出を自然の避け難き運命と見つゝも、これを人力に依つて制限せんことを企てた。

然るに其後、マルサス説が資本主義の學者に受容せられ、人口の過増、即ち失業者の増大が、資本制度發達の動力であるといふ事實が益々明白に意識せらるゝに至ると同時に、マルサス説の中、人口制限にわたる部分は全く不用に歸した。即ち資本主義の學者は、たゞ人口過増の自然律から、貧困の是認に至るまでの過程に於いてマルサス説に隨喜した。彼等は此の過程に依つて、貧困に對する自己の責任を自然の肩に轉嫁しようとしたのである。

第五講 生物學と社會主義

——ヘツケルの社會主義論批判——

一、畑達ひの議論に基く紛争

『權威』に對する反逆は殆んど輕蔑すべき程度まで極端に行はれた。マンチエスタ派の個人主義者たるハート・バート・スペンサーと形而上學的自我論者たるマックス・スチルネルとは、共に等しく餘蘊なきまで權威を貶して居る。彼等の學徒中最も淺慮なる輩は、自己の思想から現實世界との一切の交渉を排除し、例へば爰に六人の人々があるとして、それ等の人々が十分力を盡して綱を引くと云ふ如きことはあり得やう筈がない、如何とならば、適當なる機會に、一人

の者が錨を揚ぐる音頭を取るならば、他の五人の者共は、餘儀なく其一人の權威を認むる事となるであらうからと主張する。

この種の思想家からいへば、音樂などはあらう筈がなく、急激なる個人主義論者が『樂長』の動かす鞭に従ふ所の極めて集中せる權威を認めやうとは、誰れしも想像することは出来まい。論理的にして權威を無視する個人主義者の音樂は、恰も印度人が手當り次第に撃つ鐵砲と一般であり、決して近世の管弦の如く極めて調子の整つたものではないのである。

科學に於いても、思想に於いても、權威を認めざる人々の愚は、矢張り斯くの如きものである。天文學上の根本的な新發見をなしたと稱しつゝ、同時にニユートンや、カントや、ラブラースの如き學者の研究を惡評して居るのを聞くは、再考の價值なき痴言を聞くに等しいのである。従前踏んだことのある梯子の段階を踏むまでは、何人も更らに高き段階に上ることは出来ぬ。而して斯か

る任務の遂行こそ權威を構成するところの要素たるのである。思想なくして如何にして能く考へ得るか？ 智識の獲得に依らずして如何にして思想を得る事が出来るか？ 智識を有する者を外にして、何處に智識を求めんとするか？

科學上及び思想上のあらゆる權威は、當該問題に就ての智識を基礎として立てられる。社會主義者は能くカール・マルクスを引合に出す。蓋しマルクスの學説は、彼れが富の生産及び分配の理解につき同時代の何人よりも優れてゐたことを立證するからである。ラヴォアジエは、化學上の一權威である。物質の組成に就いて、彼れは同時代の他の如何なる人よりも知るところが多かつたからである。

然しながら、自身の専門の畑では權威を有するも、他の方面に於いては何等の價值なき意見を抱いてゐる人々が、畑違ひの場所に於いて積極的に判斷を下し、紛争を惹起した例は從來多く見る所である。作曲の大家が、或る音譜の價

値に就いて言及するところのものは重要視すべきであらう。けれども彼れが地質學を研究せずして、ロッキー山の起源や年齢に就いて意見を發表したとすれば、彼れのその意見に果して幾許の價値を認め得るであらうか。

二、ダーキン説と社會主義

上述の如くにして惹起されたる紛争の中で、世界の學界に紹介された適例は一八七七年九月、ミュンヒェンに於いて開催された自然科學者の會議に現はれてゐる。當時、歐羅巴の自然科學者は二派に分れて對立してゐた。即ちダーキンの『自然淘汰』の原理を承認する一派と、その反對派とである。而して兩派の指導者は何れも獨逸人であつた。尤も獨逸人の大多數はダーキン派の加擔者であつた。然るに一方佛蘭西人は何うかといふに、フロレンス死して既に十年を経過せるもなほ其勢力の下に在り、一齊にダーキン派に對抗するといふ状態

であつた。

ミュンヒェンの會議に於いて、ダーキン説のための戰鬪を指揮する名譽はヘッケルに歸した。同年九月十八日、彼れは偉大なる英人ダーキンの思想を擁護する大演説を試みて、反對派に對して戰を宣した。ヘッケルはまた諸學校に於いても進化論の教義を極力辯護したのである。兩派の論戰は猛烈を極め、果ては病理學の泰斗ヴェイルシヨは、『ダーキンの學説は直ちに社會主義に導くものなり』と大膽に斷言して會議に爆彈を抛つに至つた。

茲に於いて生物學的議論は停止した。淺るところはたゞ、ダーキン説は社會主義的なりとの恐るべき非難の汚れをば、ダーキン説から洗ひ落すことであつた。いふまでもなく、此任務も矢張りヘッケルの手に歸した。而して彼れの忠實なる援助者は、實にオスカー・シュミットであつた。

其後二ヶ月を経て、シュミットは『アウスランド』誌に寄書し『若し社會主義

者にして慎重であるならば、彼等は全力を盡して生物進化説を黙殺するであらう。何故ならば、進化説は社會主義思想の實行不可能なることを強調するものであるから』と言つた。

三、ヘッケルの主張

ヘッケルは、詳細を盡してヴィルシヨトに答へた。以下、フェルリの引抄せる所を其儘掲げることにする。

『社會主義の主張する個人の平等なるものは實行不可能であり、斯かる空想的平等は、個々人の必然的にして且つ普遍的なる不平等と絶對的に衝突する事を公然と主張する點に於いて、生物進化説の右に出づる學説なきことは事實である。』

『社會主義はあらゆる市民のために、平等の權利、平等の義務、平等の所有、及

び平等の享樂を要求する。これに反して進化説は、これ等の希望の實現は明かに實行不可能なることを立證し、人類の社會に於いては、獸類の社會に於けると同様に各成員の權利、義務、所有は平等でなく又永久に平等たり得ざることを立證する。』

『變化の大法則は、現象の變異が原初的單一より、機能の差異が本來的齊一より、組織の複雑が本來的單純より來たる事を教へる。あらゆる個人の生存條件は出生の時より既に不平等である。また其の遺傳的性質及先天的性癖には、量の多少を問はず著しき相違の存する事も考慮に入れなければならぬ。斯かる状態の下に於いて、如何にして仕事と報酬とが萬人の平等たるを得べきか？』

『社會生活が向上するに従ひ、益々分業の大原則が重要となり、全體としての鞏固なる國家の存立の爲めには、其の全成員は生活上の各種の任務を分擔する必要が生じて來る。各人の爲すべき勞働、併びに勞働に要する力、技能、及び

金錢等の支出が次第に多岐に分れ行くが故に、此の勞働に對する報酬も亦、從つて多岐多様たるを免れない。斯かる事實は簡單明瞭なものであつて、苟くも識見あり教養ある政治家であるならば、かの社會主義者等の抱く、不合理な空想的な平等思想に對する最良の解毒劑として生物進化説を主張すべき筈のものと思はれる。』

『ツイルシヨ』が其の進化説に對する辯難に於いて念頭に置いたものは、單なる變態的發達の理論たる生物由來説と云ふよりも、寧ろダーキン説即ち自然淘汰説であつた。此の二つは常に混同されてゐる。ダーキン説は社會主義的とはいひ得ない。』

『何人かと若し、此ダーキン説に政治的傾向を附與せんとならば——それはまことに差支ない事であるが——その傾向は正に貴族政治的たるべきであつて民主々義的たるを得ない。況んや社會主義的たるを得ざることは勿論である。』

『淘汰説に依れば、人類社會に於いては、植物や動物の社會に於けると等しく、常に到る所、特權を有する少數者のみが成功して生存し發達する。これに反して、多數者は多かれ少なかれ尙早的に苦しみ亡びて終ふのである。各種の動植物の種子や卵は數限りない。それより生ずる幼少個體も亦無數である。けれども、幸にして充分成熟し生存の目標に達し得るもの、數は、比較的に微々たるものに過ぎないのである。』

『残忍無慈悲なる生存競争は、全生物界を通じて隨所に其の勢を逞うして居る。それは生存競争なるもの、性質上己むを得ぬことである。而してあらゆる生物間に於ける此の頑強なる永劫の競争は、否定すべからざる一事實となり、極めて少數なる最强者（即ち適者）は、此の闘争場裡に於ける凱旋者たり得るも、不運なる競争者中の大多數は必然的に亡ぶべき運命を有して居る。斯かる悲劇的運命は、實に悼しい事には相違ないが、これを否定しまたは變更するこ

とは不可能である。招かれる者は多くして擇ばれるものは少ないのである。』
 『淘汰即ち適者の撰擇は、必然に非適者たる大多數者の排斥又は破壊を伴ふ。斯くして、他の博學なる英國人は、ダーキン主義の基本原則を「適者の生存、優者の勝利」と呼んでゐる。』

『淘汰の原則は毫も民主的ではなく、反對に徹頭徹尾貴族的である。茲に於いてヴイルシヨ一の言ふ如く、窮極の論理的結論まで推しつめたダーキン説には政治家に取つて「非常に危険なる一方面」がありとすれば、その危険は、疑もなく、ダーキン説は貴族的憧憬を支持するといふ點にある。』

ヘッケルの名著『創造史』第二卷の末尾を繙けば、其處にはヴイルシヨ一に對する彼れの有力なる反駁論が掲げられてゐる。ヴイルシヨ一は、伯林に於いて試みた其の有名なる演説の中に結論して『人類は猿より進化せるものでないことは、絶対に確實である』と言つてゐる。

ヘッケルはこれに就き動物學上既知の事實の概要を述べ、然る後次の如く結論して居る。『事態斯くの如きを以つて、此問題に就き權威者として認められる我々動物學者は、確かに次の質問を發することが出来る。即ち人類學者と稱する多くの人々は、斯くても尙、人類は猿より進化したといふ定説に、何等の現實的證據なしと主張し得るか？動物學者に非らざるヴイルシヨ一、ランケ其他の人々は、斯くても尙、人類學會や其の他諸種の學會に於いて年々試みる講演の中で、此の猿説は架空の臆説、立證なき主張にして、自然哲學者の單なる夢想論なりと主張し得るのか？この上なく明晰にして且つ總べての動物學者に依つて異議なく承認せられて居る證據が充分提供されてゐるのに、これ等の人類學者は斯くても尙、この猿説の確實なる證據を示せと要求し得るか？屢々引用されるヴイルシヨ一の猿説反對論が一般公衆の間に好評を以つて迎へられたのは、此の有名なる自然科學者が、全く畑違ひの病理學方面に於いて高く

權威を有してゐたからである。彼れの細胞病理學は、醫學の全領域に亘つて巧みに細胞説を應用したものであるが、彼れは今より三十年前此病理學説に依つて斯界に大なる進歩を齎らしたものである。然しながら彼れの與へた此大なる永久的功績は、彼れが進化論に對して採つた頑迷なる否定的態度とは何等關係する所がない。』

四、ヘッケルの自繩自縛

進化論に對するヴイルシヨ一の反對論に對してヘッケルの用ゐた議論が、其儘ヘッケル自身の社會主義反對論に當て嵌らうとは、恐らく彼れ自身も考へ及ばなかつたところであらう。

ヘッケルの『屢々引用される社會主義反對論』が、『一般公衆の間に好評を以つて迎へられた』のは、此有名なる自然科学者が、『全く畑違ひの方面たる

動物學界に於いて、高き權威を有してゐたから』である。彼れの『胎生學に於いて發見せる生物發生の原理は』、『今より三十年前斯界に大なる進歩を齎らしたものである。然しながら彼れの與へた此大なる永久的功績は彼れが社會主義に對して採つた頑迷なる否定的態度とは何等關係する所がない』のである。

ヴイルシヨ一は動物學者ではないから、進化の價値を判斷することは出來ないとのヘッケルの抗議は御尤な次第である。同じ筆法で社會主義者は次の如く主張するも亦當然である。即ちヴイルシヨ一が動物學に就て知る所少なきよりも尙ほ著しく、ヘッケルは社會主義に就いて知る所少なきが故に、彼れは社會主義とダーキン説との關係に就いて評價するの資格なきものである。

ヘッケルが其謂ゆる社會主義なるものに對して爲した批評の蕪雜なることは彼れがカール・マルクス及び其他の科學的社會主義者の理論に關しては何事も知らなかつたと云ふ點に示される。彼れが非難した如き社會主義は、彼れが非

難を加へた時に先だつ約三十年前、既に社會主義者自身に依つて捨てられたものである。

五、惡平等のブルジョアの起原

彼の所謂『不合理なる平等思想』なるものは、空想的社會主義者の專有財産ではなかつた。彼等は一七八九年に於けるブルジョアの革命主義者からそれを借りて來たのであつた。此の平等はエンゲルスのいふ如く、『法律の前に於けるブルジョアの平等の中に實體化せるもの』に過ぎず、換言すれば、『法律の前に於けるあらゆる商品所有者の平等』に外ならぬものである。『自由、平等、友愛』なる人氣取語を用ひ、これを佛蘭西の監獄の門前に書き止めてブルジョアの代表的用語たらしめたものは、實に此の奮闘的ブルジョア階級であつた。

ヘッケルの批評の中で、更らにいま一つの注目すべき文句は、『人類社會に於いては獸類社會に於けると同様』に、各人の義務その他のものは平等たる能はずとの主張である。これが社會主義に就いての批評たり得る唯一の點は、社會の階級的差別の撤廢の可能性を否定するところにあるらしい。ヘッケルが特に斯様な意味で用ひたか否かを明かにすべき何等の手懸りもないが、他の何等かの適用あらうとも、それは決して社會主義者の立場に反對する性質のものではあり得ない故、私は單にこの點に就いて彼れの主張の失敗を示せば足りるのである。

六、蜜蜂の階級

『蜜蜂』の社會には階級の差別があると言ひ得る。而して我々は、この階級が『蜜蜂の社會主義』と稱し得る如き何等の人類觀念に依つても廢除し得ざる名

稱であることを許さなければならない。この理由は、却つて、類推に依る一切の社會主義反對論を不可能ならしむるものである。働き蜂は、蜜蜂の社會に於いて、『生理上』の勞働以外には、何事をも爲す能力を有しない。それは母性なき雌である。その結果、種族の蕃殖に關する全負擔は、女王蜂に轉嫁される。女王蜂は専ら生殖機能の點にのみ發達せるものであつて、決して働き蜂とはなり得ないのである、雄の種蜂としての所謂懶け蜂についても亦同様である。

ハックスレー教授は言ふ。「蜜蜂の巢は有機的政體である。即ち其の各員のなす役割は有機的必要によつて決定される一社會である。女王蜂と働き蜂と雄蜂とは、謂はゞ顯著なる物理的障壁によつて區劃されたる族姓的階級である」と。エルンスト・ウンターマンは、其の著「マルクス經濟學」の中で、「博物學の如何なる教科書も、種々異つた生物社會に就いて叙述してゐる。例へば蜜蜂

の社會は君主國であり蟻の社會は共和國である。然し何づれの場合にも、これ等の社會を決定するものは生物學上の差異である。女王蜂、働き蜂、惰け蜂は器官に就いて夫々異つた構造を有し、各異つた特殊器官を具へてゐる。女王蜂は單に懷胎と産卵との器官を有するのみであり、惰け蜂は女王蜂を受胎せしむる以外、何等の機能も盡さない。そして働き蜂のみ單り、花粉と蜜とを集め、蜜蠟を造る器官を有してゐる。斯くの如き蜜蜂の社會に於ける生理的差異を、彼れは社會的階級と混同してゐるのである。右の議論を社會主義者の階級撤廢論の反對論として使用し得るには、先づ女王は餓ゑてもなほ洗濯する能はず、平民の娘はまた、その父が公爵に叙せられるとしてもなほ、冠冕を着くる能はざることを證明せねばならぬ。

斯様な生物學的區別を有せざる動物社會の存することは勿論である。然しかる動物社會には、生活資料の私有といふことがない。従つて何等の階級もあ

り得ないのである。ペリカンや鳥の社會に於いても怠惰に就いての正當な理由として認めらるゝところは、次の三事項にすぎぬ。即ち幼少、考齡、疾病又は變災これである。

『試みに勞働階級の小供と寄生階級の小供とを比較して見よ。彼等は熟れも宇宙の大神秘の中から生れたものである。先づ彼等のたわやかな小肉體を調べて見よ。果して一方の小供に拍車があり、他方の小供には鞍があるであらうか？ しかも一方は長じて放逸懶惰の徒となり、他方は餓ゑ苛まされた勞働者となり一方は頂上に在つて朽ち、他方はドン底に在つてイチケ者となる』と。これは最近或る社會學者の言つた言葉である。

勿論この二人は現實に於いても、また可能的にも、平等のものではないであらう。けれども、彼等に與へられる出發點が不平等でなければならぬと云ふ理由は無いのである。

若し一方に與へられてゐる幾多の機會が、他方には拒まれてゐるとしたならば、我々は抑も如何にして、一方の小供が何等かの意味に於いてヨリ優良者であるかを見出し得るであらうか？

茲に於いて、ヘッケルの比較論は再び頓挫しなければならぬ。自然界に於いては強くして能力ある者のみが生存競争に勝ち得る。自然界は公平である。然るに資本制社會に於いては、虚弱なる富者の小供は、甘く育てられて成熟し、しかも自身と同じ虚弱なる小供を遺す。一方、勞働者の頑丈な小供は、毒を含んだ乳の爲め生命を奪はれるか、然らずんば、低き賃銀の爲め結婚を妨げられるのである。

自然界の『適者』とは、道徳上如何なる意味に於いても善者を意味しない。尤も間接には、動物界に於いて一定の道義的原理の慣行せられる結果、適性を生じ又は増大することあるは事實である。然るに、現代社會に於ける幾多の事例

に就いて見るに、適性と云ふことは實に、自然界に於いて用ゐられ得る意味での『最善』すらも意味しないのである。

現社會に於いて、事業をなす上に必要な資格は、良心の感じを鈍くして、平氣で虚言を吐くことにある。現社會に於いて、正直は自殺を意味する。

自然淘汰は『貴族的憧憬を支持する』との主張も同様の虚偽を含むものである。此の主張は、貴族なるものは社會の上位に居るに適するが故に、上位に居るのだと云ふ假定に立脚してゐる。伯林に於いて最近曝露された所により、ヘツケルの自國たる獨逸の貴族は、不正鑑詰の『適者』なることが明かとなつた。

七、自然界の競争と人間社會の競争

自然界に『生存競争』あるが故に、社會にも競争あるは當然であると云ふのが、ヘツケルの主なる主張である。然るにクロボトキンは先づこれに反對して

言ふ。ヘツケルは『有生界一般を通じて、凡ゆる生物間には』殘忍、無慈悲な『生存競争』が蔓つてゐると説くが、それは自然界を全く誤解したものである。斯かる主張を現社會の辯護に使用するは、畢竟するに、人類社會なるものはその模範を最高形態の有機的生命に求めずして、寧ろ最低形態の有機的生命に求むべきであると云ふに等しいこととなる。

スペンサーはヘツケルの此立場を採用した。それに就き教授リッチーは巧妙なる批評を下して『植物や下等動物の間に見られる競争は、主として同種個體間に行はれるものである。しかしてスペンサーが斯くまで賞讃する個人間の競争なるものは、斯かる原始的種類のものである』と。

更らにクロボトキンは言ふ。『試みに相互に絶えず闘争する者と、相互に扶助し合ふ者と、その何づれが適者なるかと自然界に問へ。我々は直ちに、相互扶助の慣性を取得した動物こそ、疑ひもなく適者なる事を知るであらう』と。

『無慈悲なる闘争』を望まじき事とする主張に就いて、ハックスレーは次の如く適言してゐる。『從來に於ける社會のあらゆる形態を通じて、個人と個人との間に於ける闘争を最も嚴密に制限した社會こそ最も完全に近いものである』と。

原生物動物間に於ける眞理は如何様であらうとも、我々は、ラスキンの次の言葉を確認をもつて社會に適用することが出来る。

『協同は、何處に於いても常に、生の法則であり、競争はまた、何處に於いても常に死の法則である。』

八、法則の認識と社會の進歩

人類社會は終に、人類が自然界の偶然的方法に干渉し一つの目的に對して手段を按排する所の發達點に到着する。シアバレーリイ教授は、火星の表面に運

河あるを見たとき考へ、それから推測して火星には知力ある住民が居ると斷言した。盲目なる自然と意圖ある理性との差異は、即ち迂回して流れる河と直通した運河との差異である。

斯くて人類社會は既に、人類の自覺と、自己協定の可能とが一因子となれる段階に達して居る。これは愕くべき進歩であつて、其の將來に於ける可能性も限りなきものである如く思はれる。けれどもこれが有効たり得るに先だち、社會のあらゆる根本的法則を知悉することが必要である。

我々は電閃運動の法則を知つて後、始めて電閃を支配することが出来た。空中飛翔の法則を知るまでは、現實に飛行機を得ることは出来なかつた。社會主義が社會問題を解決すると云ふのは、社會主義なるものが大にしては社會的發達一般の法則、小にしては現存社會の法則に就いての説明を與へるからではなく、社會主義そのものがこの説明それ自身であるからである。

斯かる法則の上に我々の信仰は立脚するものであつて、我々は自己の生活に重大なる影響を及ぼす社會制度をば意識的に此法則と調和せしむることに依つて、盲目的必然の奴隷たる境涯から解放されるのである。

エンゲルスが適切に言つた如く、『人類の社會組織は、從來、自然と歴史とに依つて課せられる必然として人類に對してゐたが、今や人類自身の自由行動の結果となる。從來歴史を支配してゐた外部の客觀的勢力は、人類自身の支配の下に來る。この時以後人類は始めて、充分の自覺を以つて自己の歴史を造ることとなるであらう。——この時以後、人類に依つて運轉される社會の諸原因は、過半にわたり且つ不斷に増進する所の程度を以つて、人類の欲する結果を齎らすこととなるであらう。これ即ち、人類が必然の王國から、自由の王國に躍り込むを意味するものである。——』

第六講 宗教と社會

——キツドの社會進化論——

一、社會學の後れてゐる理由

社會問題の研究者にして多少炯眼なる人々は、必らずや社會學の進歩の後れてゐる事實に着眼したであらう。キツドも亦此の事實に着眼し、これを痛嘆した一人である。而して彼れは自分こそ此事實を變更すべき使命を有するものと信じてゐただけに、それだけ彼れの痛嘆は甚しかつたのである。

彼れがその任務に着手した態度は、前途洋々たるものがあつた。彼れは社會學は何故茫洋裡に彷徨するか理由は知つてゐた。その理由は社會學者が生物

學とその説明方法とに充分の注意を拂はなかつたことにある。彼れはその著『社會進化論』の次の一句に依つてこの思想を最もよく言現はして居る。『人類社會なるものは、畢竟、生命史上に於ける最高現象たるにすぎぬ事、随つて社會現象を取扱ふ凡ゆる知識部門は、その眞の基礎を生物學的諸科學の上に置くものなる事——此等の兩事實は、人類社會を論究する所の諸科學に依つて、多年に亘り閑却されてゐたやうに見える。』キツドは斯く適切に論を起しながら、而も結局は宗教上の言葉を以つて一切の進歩を叙述するに終つたことは、後段述べる通りである。

二、競争の漸變

彼れの著書の中頃には社會主義の危険を説明した長文の一章がある。しかもそれから二頁目には、次の如き記事あるを見て我々は少なからず驚かされた。

『前世紀中、他の殆んど總べての方面に於いて科學は大なる進歩を遂げたにも拘らず、嚴密に人類社會の科學と稱すべきものは一もないと斷言せざるを得ないのである。』

『現存する如何なる知識も、多かれ少なかれ混沌たる状態で多くの人々の腦裡に散在してゐる。現代の錯綜せる社會現象の中に作用しつゝある諸法則の統一といふ概念を最近最も著しく促進する傾向のあつたものは、概括と云ふ事である。而して此概括なるものが、正統學派から來たものでないことは、我々が如何にそれを認むるに躊躇すればとて恐らく間違ひのない事實であらう。それは寧ろカール・マルクスを首腦とする社會革命學派によつて提供されたものである。』

キツドは徹底的ダイキン論者であると同時に、またワイズマンを嘆賞しその見解を受け容れた。而して此等の二大學者こそ社會學の救主たるべきものと信

じてゐた。

然しキッドの生物學的素養には、二つの容易ならぬ缺陷がある。彼れは、クロボトキンの『相互扶助論』及びデ・フリーの『變化説』が、未だ社會に發表せられざるに先だつて、その論を組み立てたため、此等の兩者の恩恵に浴する事が出来なかつた。若し彼れが當時『十九世紀評論』誌上に載つてゐたクロボトキンの論文の比較的初期のものでも讀んでゐたなら、彼れは恐らく『不斷的にして且つ必然不可避なる闘争及競争』に就いて斯くまで喋々することは無かつたであらう。

彼れは勿論舊來の生物突變説を排斥しつつ、二十年前のダーキン派學徒に倣つて、進化の緩漫性を誇張した。若し彼れにしてデ・フリーの實驗及その結果に就いて知る所があつたとすれば、彼れは有機的進化の『緩漫』に關するその見解を變更したかも知れぬ。

三、淘汰と社會進化

彼れは、社會進化の根本的法則は、ダーキン説の中に見出し得るものと信じ、この目的に向つて大膽に驀進した。彼れの穿鑿は簡單にして上首尾であつた。彼れはその穿鑿に着手して間もなく此法則を見出した。それはダーキンの自然淘汰説に外ならなかつた。抑も有機的生命の最低級なる形態に於いては、劣等なる多數者は犠牲に供せられ、その結果極めて少數の優良者のみ繁殖して、自種屬の最高能率を保存することが出来る。若しこの點に於いて生存競争を止め得るものとすれば、優者も劣者も共に繁殖し斯くして種屬の進歩は止み忽ちにして墮落が生ずるであらう。これに依つてこれを觀れば、下級生物間の進歩なるものは、少數優者の爲に多數の不適者を絶えず淘汰する所の生存競争の結果であることは明かである。

キッドは、この原則をその儘に人類社會の領域に適用した。彼れに依れば、優秀なる少数者は社會を支配し、社會をして最高度の能率を維持せしめんがために選擇されるものであつて、この目的のために多數者は篩ひのけられることを甘んじなければならぬ。若しキッドにして、進化の要素としては相互扶助は相互闘争に優ると云ふ事實の充分なる證據を知つてゐたとすれば、自説に對する彼れの信頼は著しく減殺されたであらう。即ち彼れは有機的階梯の上進するに従ひ、協力が競争に代る度合も亦ますます上進するものなることを知るにいたつたであらう。彼れは此點を見落し、又はその力を評價し損ねてゐるとはいへ、しかも、低級なる有機界と人類社會との間には大なる一差異の存することはこれを認めてゐた。

四、理性の否定

この差異と云ふのは、即ち盲目的無意識的なる力の作用と、人間の理性力との差異である。この差異こそ、レスター・ウオードが彼れの社會學の基礎たらしめたものである。けれどもキッドとウオードとは、この點に於いて完全なる對照をなしてゐる。ウオードは、將來に於ける進歩は理性の使用増加に懸ると信じたが、キッドは、斯くの如き道程は却つて不幸を齎らすものと信じ、人類が大にしては自然力一般、小にしては生存競争に干渉せざる所に進歩が存するものと見た。ハックスレーは『生存競争の最も嚴密に制限せられた』社會こそ、最も完全に近い社會であると主張した。ダーキンは曰く『同情心ある成員を最も多く含む社會こそ最も能く繁榮して多數の子孫を繁殖せしむるものである』と。クロボトキンは動物間に於いてすら競争の價値は疑はしきものとなし、動物間に於いても『種屬の進歩的進化にして劇甚なる競争の期間に基礎を置かざるもの一つもなし』と主張して居る。是れ實にキッドの狹隘なる眼界に

映じたることなき——不幸にして彼れの全學説を通じて——進歩の一形相である。

茲に於いてキッドは、次の如き奇怪なる主張を採るに至つたのである。即ち人類進歩の繼續は、多數者が現在の苦難を軽減する爲め、其の理性の使用を斷念することに懸ると。社會の人々から見て、劇甚なる生存競争を繼續することが理性に反するものとなることは彼れも認めてゐる。彼れは又、理性に依つて人類は何故、斯かる競争を廢除せざるかと問ふた。これに對する彼れの解答こそ、彼れの理論體系の基礎をなすものである。

五、キッドの貧困觀

第一に、若し人類が闘争を廢したとすれば、進歩は熄んでしまふであらう。彼れは其『人類進歩の諸條件』と題する興味ある一章をこれが説明に供じてゐる。

る。彼れは此章の中に人類歴史の概要を掲げてゐるが、これは、同じ問題に就いてクロボトキンが『相互扶助論』の中に論じてゐるところに答へたものと云つてもいい。彼れは人類に就いて曰く『近世科學の眼鏡を通して過去を顧みる時我々は最初先づ人類なるものが外觀に於いては、多くの恐るべき競争者に對して微かにその位置を守つてゐる一動物に過ぎないことを見る』と。更らに又『人類以前の生命史を顧みる時、我々はそれが一方に不斷の進歩の記録であり、他方には不斷の緊迫と競争との記録であることを知る。我々の周圍に見られる此秩序ある美しき世界は、今や此處に棲息するあらゆる生物間に於ける間斷なき競争——主として異なる種屬間ではなく、同一種屬の個體間に行はれる——の舞臺であり、過去に於いても常にさうであつた。我々の脚下に廣がつてゐる緑の芝生の中にある諸種の植物は互ひに暗黙の競争を行つてゐる。故に若し外部からの妨害なくこの競争が行はれる儘に放任されたとすれば、結局弱者

の根絶を見るまで、競争は休止することがないであらう」と。彼れは更らに結論して言ふ。他の條件に變化なき限り、淘汰の及ぶ範圍が廣ければ廣い程、競争が劇しければ劇しい程、また淘汰が嚴密に行はるれば行はれる程、それだけ進歩は大となるであらう」と。人類社會を論ずるに至つても、彼れは依然「競争」が緩和せられざることを見るのである。彼れは曰く「我々は人類歴史の單一形態たる、人類の發達が依つてその下に進行する所の緊張と力働とに留意する必要がある。人類の諸社會は、これを構成する個々人と同じく、その生存する境遇の所産と見做すべきである——その境遇とは即ち、間断なく進行する所の競争に於いて、適者の生存するといふことである」と。キッドとクロボトキンとの分岐點は、社會と社會との間の競争——爰にも多少の差異はあるが——に關するものではなく、社會内部に於ける競争と競争とを最も完全に停止せる社會に勝利の榮冠が歸するとクロボトキンが主張するに對して、キッドは全然

これと反對の見解を持するといふ點に有してゐる。

斯かる論争が結局如何に決定されやうとも、文明史中未曾有の最高點に達した現代社會が、今尚その大多數成員間の生存競争によつて分裂してゐるといふ一事はこれを否定することは出來ぬ。凡ゆる改革者の失望の原因たる恐るべき貧困は、此競争に基くものであつて、この事實は、キッドも明に認めてゐる。彼れは此の點を吳麻化さうとはしなかつた。他方に於いて彼れは貧困の存在を論證しようとし、極めて重要な多くの證據を擧げてゐる。彼れは改革に就いての要求が、煽動家たちにのみ限られるものでない事を示すに意を注いでゐる。ハックスレーは個人主義にも社會主義にも反對したとは云へ、社會の實狀に就いては心から憂へてゐた。彼れは曰く、「現代文明中の最良のもの」と雖も、何等の價值ある理想を體化せざる、または確乎不動の眞價をも有せざる人類狀態を呈示するに過ぎない如く見える。私は躊躇する所なく言ふ、若し人類種族

の大部分の状態に對して一大改善をなすの希望がないとすれば、また若し知識の増加、及びその結果たる自然界に對する支配の擴大と、此の支配より生ずる富とが、多數人類の肉體的及道德的墮落を伴ふ缺乏の範圍と強度とを減じないものとすれば、私は寧ろ斯かる状態を一掃して呉れる親切な彗星でも出現して來ることを祈仰する者である』と、彼れはまた曰く『貧困の隼鷹が永へに人類の生存機能を破り人類を破滅の淵に沈淪せしむる限り、人類のプロメシユス(註、希臘神話中の神名。天火を盗み來り其用法を人類に教へたる罪に依つて、カウ)が天火を盗んかサス山上に繋がれ、隼鷹の爲に毎日その肝臓を喰はれて苦められた神を謂ふ。)で自己の從僕たらしめ、而して天地の諸々の靈が彼れに服従する事ありとも、それが彼れにとつて何の利益となるであらう?と。

六、キツドの社會主義觀

キツドは社會主義者の口を籍りて、この問題を次の如く述べてゐる。『この新

たなる信仰の奉持者たちは曰く、多くの人々がなほ働いて窮乏し、極めて僅かな人々が閑暇を有して富んでゆくのであるならば、地球上の荒廢せる場所が商業の公道に變へられたからとて、それが何になる? 科學のすべての應用が勞働者の勞働を軽減するのでないならば、知識が増進したからとてそれが勞働者にとつて何の益になる? 富は蓄積されるかも知れぬ。公私兩面の壯麗は世界史上その比を見ざるまでに發達したかも知れぬ。然し貧の仇神がなほ、眼の落ち窪んだ怪物然として祝宴に臨んでゐるのであるとすれば、社會は抑も如何なる點に於いてヨリ善くなつてゐるのであるか?』と。

この驚くべき状態に對する觀察こそ、實にジョン・スチュアート・ミルをして『そのすべての機會を含める共產主義と、そのすべての苦痛と不正とを含める現社會状態との』何づれか一方を擇ぶべき場合に立至つたとすれば——『共產主義に伴ふ大小あらゆる困難の如きは、秤上の塵芥にもすぎざるものとなるであ

らう』と言はしめたものである。

キツドはかゝる生存競争及びそれに伴ふ貧困の廢除に就いての要求が至極道理あることであり、而して此廢除は社會主義によつて行はるべきものなることを承認するに躊躇しなかつた。

「我々にして若し、論究すべき問題の性質を能く理解せんとならば、社會主義の理論を目して、病的頭腦の亢奮的想像なりとする俗見を、我々の心裡から一掃する必要がある。社會主義の理論は決して、左様なものではなく、それは實に冷靜なる理性の、眞實にして誇張なき教旨である」と彼れは言ふ。

彼れはまた、社會主義に對する批評の多くが甚だ當を得てをらぬことを認めめてゐる。即ち「これ等の社會主義者の議論が、その反對論者側に見出さるゝを常とするところの著書文章によつて有効に答へられたと考へるよりも大なる誤謬はない」と。また「現人民中の下層階級の理性は決して現存状態の維持を承

認するものに非ざる」事をも認め且つ主張してゐる。

然るに若しキツドの主張する如く、生存競争及びそれに伴ふ貧困を根絶するとすれば、その結果進歩は杜絶するものとし、而して現在苦痛を受けてゐる人々が斯かる結果の生ずべき事を認識したとしても、斯く認識せるだけで果して、彼等は右の如き結果を生ぜしめないやうに努めることゝなるであらうか。キツド自身はさうは考へなかつた。彼れは斯様な想像を不條理なものとしてゐた。彼れに依れば、人類はかゝる遠遠なる動機に依つてうごかされるものではない。斯くて彼れはマロックの言葉を引用してゐる。即ち「誰れか農田をいま一代續かせる爲めに現在に於ける炭斗一杯分の採掘を拒むものがあらうか?」と。勿論、拒むものはなく、今日左様な事を苦慮せずとも、將來我々の子孫は他の保障方法を知るに至るであらう。

かくしてキツドに言はしむれば、問題は次ぎの形態をとることゝなるのである。

る。勞働階級にして若しその理性を使用し社會主義を採用することに依つて自己の貧困と窮乏とを根絶することが出来、而して實際遼遠なる考慮によつて影響されるゝことがないとするれば、何故彼等は起つて現在の不幸から脱却しないのか？これ實にキツドの讀者の心裡に益々執拗に浮びに來たる疑問である。

實際これは、キツド自身にとつても一大神祕であつた。而して歴史は又も繰り返す——即ち神祕は宗教の母となるのである。キツドは、勞働階級の斯かる不條理にして説明し難き屈服は、宗教それ自身の手細工であると説くのだ。然らずんば、これは如何にして説明し得るであらう？現象が若し自然的のものでないとすれば、それは超自然的のものでなければならぬ。若し合理的のものでないとすれば、それは宗教的のものでなければならぬ。

斯様に彼れの學說の全景を眺める事が出来るやうになつたとき、我々は彼れの學說なるものが、要するにカントの『至上命令』の近代化した復活にすぎざる

こと、而して我々の義務は、如何に困難であり、又は無趣味なものであつても、神の意思と見做すべきものとなることを見るのである。

七、キツドの歴史觀

我々は更らに分解を進めるに先だち、彼れが此貴重なる原理に依つて歴史を説明せんとした悼まじき努力を辿つて見ようと思ふ。

基督教の出現以前に於ける古代世界の下層階級は、その悲惨なる運命を改善せんと企てる毎に、容赦なく粉碎されてしまふのが常であつた。これ蓋し、支配階級は理性の命ずるところに従つてのみ活動し、宗教上の考慮に依つて影響せられなかつた結果である。この時代にはまだ、偉大なる、そしてキツドの見るところに依れば唯一の宗教たる基督教は出現しなかつたから、當時の下層階級が果して如何なる状態にあつたかを知るは困難である。然しながら基督教の

出現以後に於いては、全く趣きを異にして來た。羅馬帝國の末期に當り、奴隸制度は消滅した。これは——歴史上の記録は頗る明瞭を缺いてゐるとはいへ——奴隸が反抗した結果に違ひないのである。然るに今や支配階級は血の海を以つて叛逆を鎮壓する代りに、却つて自ら屈服したのである。これ蓋し「愛他的觀念の巨大なる資源」——奴隸所有者の「性格を和らぐる」ことに依つて、彼等をして人身の所有權を許す奴隸制度を擁護せざらしめた所の——を造り出して保存した基督教の活動に基くものである。

その後、この奴隸制度が復活して、米國南部諸州一帯に蔓つた際、これが廢止を爲し遂げたものは、實に救世の教義と神の前には萬人平等なりとの教義とであつて、決して理性の働きに依るものではなかつた。何故ならば、これ等の教義は何づれも理性に基くものではなく、信仰に基くものであるから。斯かる宗教的歴史觀は餘りに淺薄、餘りに非現實的であつて、冗々しく批評する必要を見ない。然し序ながら一言したきことは、自己の屈服するまで宗教的教義の影響によつて『その性格を和らげられて』ゐた筈の此等南部諸州に於ける奴隸所有者たちが、多年に亘つて血なまぐさき鬭争を重ねた末、遂に自ら屈服せざるを得ざるに至り、始めて屈したといふ事實は、右に掲げたキツドの見解とは容易に一致しさうもないと考へられる。キツドは堅く主張して曰く、宗教の感化によつて鋒鏑を鈍らすにあらずんば、如何なる支配階級も必らず勝利を得るに違ひないと。

南部諸州の支配階級は、その奴隸との間ではなく、北部諸州の支配階級との間に交戦してゐたものであり、而して此等の北部諸州の支配階級は宗教の暖か感化を受けてゐたに拘らず、その鋒鏑は毫も弱められた様子がなかつ云ふ事實を見得るだけの史眼は、彼れキツドの所有せざるところであつた。

彼れにして若し此事實を見たとすれば、彼れは恐らく北部支配階級は正義の

ために戦つたとの理由に依つて、これを説明したであらう。何故ならば、彼れの如き半盲的思想家にとつては、勇敢なる北方人が戦つたのは、畢竟するところ彼等自身の有するいま一つの奴隷制度を擁護せんが爲だといふ事實は、容易に認識され得べくもないからである。

キツドの観るところに依れば、佛蘭西革命は二つの掠奪階級間の戦争ではなく、支配者と人民との間の闘争であつた。支配階級の心情及性格は、當時すでに、宗教の影響に基いて『徐々に蓄積されてゐた多量の人道的觀念』に依つて『和らげ』られてゐたのである。キツドは言明して曰く『人民の主義が勝つたのは、これ等支配階級の心情に訴へたからで街頭に訴へたからではない』と。斯くて、宗教の力で人道化され心やわらげられた佛蘭西の支配階級は遂に屈服することゝなつたのである——激烈な血腥き闘争を重ねた後に！

八、社會主義と生存競争

斯くの如き次第であるから、キツドが社會主義に反対したからといつて、これは敢て異とするに足らぬ。彼れの提出せる多くの社會主義反對論中、彼れの理論體系に重要缺くべからざるものがたゞ一つある。それは即ち、社會主義は生存競争を停止し、かくて一切の進歩の第一原因と彼れが見做してゐる自然淘汰の作用を廢除するに至るであらうと云ふ反對論である。

現社會を呪咀する墮落的生存競争は將來の進歩に必要であるとの思想は、キツドのブルデオアの頭腦に基く觀念的幻影であつて、斯かる思想は近世の實驗科學中に何等の本質的位置をも有せざるものである。斯様な現存してゐる生存競争が、社會的に望まじき何等かの意味に於いて適者たる人々の生存を確保するか否かの問題に就いては、第五講『生物學と社會主義』の中で充分に攻究した

ところである。

九、宗教の使命

キッドが若し、現在に於ける被搾取労働階級は、將來に於ける人類の利益の爲に自己の利益を犠牲にしてゐると云ふ風に考へたとすれば、彼れは自己の惡戯に依つて翻弄されてゐるものと云はねばならぬ。彼れが將來に於ける人類の利益と考へてゐるところのものは、要するに、現在に於ける支配階級の崇高化され理想化された利益に外ならぬものである。茲にキッドの立場なるものを證し詰めれば、労働階級は支配階級の利益の爲めに、黙々として服従して居らねばならぬ、而してこの服従は、當然のものでもなく、また道理あることでもない故に、必然宗教に歸すべきであると云ふことになる。斯くキッドの哲學から、その形而上學的扮飾を剝ぎとつてしまふと、それは極めて道理ある言分を

少なからず含むこととなるのである。

然しながら、二十世紀の今日、單り宗教の力に依つてのみ労働階級の永續的服従を得ようとするは無益であらう。從來、被壓制階級に對する抑制が總べての宗教の主要なる職能であつたことは容易に認め得る。ラスキンは富裕階級の一人として英吉利の國教を次の如く定義してゐるが、これも矢張り右の見地に基けるものである。即ち、『宗教上の儀式を行ひ、而して我々自身が歡樂に耽りつゝある間に暴民を靜穩に働かしむべく、眠氣催しの眞理——又は虚偽——を説教するもの』これ即ち英吉利の國教である。まことに、神學が未だ科學に依つて壊滅されなかつた時代にあつては、宗教は他から何等の力をも藉ることなくしてかゝる結果を全うすることが出来たのである。斯様な民衆抑壓は、普通の自由思想家から見て如何に好ましからぬものであらうとも、種族のためには有用であつたといふ、キッドの主張も亦多くの眞理を含むものである。

如何なる事物にしる、存在する以上は現實に意味あるものであり、而して數世紀に亘つて存在せる事物は何等か有用なる機能を有してゐたに違ひないといふ事は、進化論に含まれる本質的にして且つ周知の主張である。この見地からすれば、奴隸でさへも當然存在すべき理由を有してゐたものとする事が出来る。北米の土人が歐洲文明に順應し得なかつた理由は、かれらが幾世紀間にも亘つて白人種の間に行はれたる奴隸制度と農奴制度とを経験しなかつたといふ事實の中に見出し得るであらう。蓋し此等の兩制度ありしが故に、白人種は近世文明に缺くべからざる、連續漸久的な勞働の能力を發達せし得たのである。

宗教は、それが未來の極樂淨土に於ける夢のやうな報酬を約束し、斯くして奴隸制度を益々耐え得べきものたらしめ以つて如上の傷ましき訓練を助長せる間は、社會の發達上有要なる役目を盡してゐた。この事實は過去に於ける宗教を正當のものとなし得るが、將來宗教を維持すべき適當な理由とはならぬ。

而して單り奴隸社會にのみ有用なる陳腐化した迷信の尻押しをすることを、骨折甲斐あることだと考へる如き知識の薄弱な社會主義者は極めて僅少にすぎないといふ事實は、蓋し意を強うするに足る事柄である。宗教的信仰の眞の職能が右の事實に存する事は、從來支配階級が敏速に理解せる所であつた。僧侶黨の一代議士ウインドホオルストが獨逸議會に於いて、民衆の間に無宗教思想の傳播を獎勵する勿れとブルヂオアの立法者に訴へた事は、これが適例と看るべきものである。彼れは憤激の餘り傍らに社會民主黨員が耳を聳て、居り、また普く世人が耳を傾けて居ることも打ち忘れて「人民にして若し信仰を失ふとすれば、彼等は最早その堪え難き苦痛を忍ぶ能はず、謀叛するに至るであらう」と。キッドが三百頁を費して言はんとした事を一言にして彼れは盡してゐる。

十、僧侶と新聞記者と教員

この見解を受け容れて労働階級の解放を遂ぐるには、自由思想だけで充分であると結論する者は、蓋し一大迷想の犠牲者である。支配階級がその犠牲者を黙従せしめんとして専ら僧侶に頼つた時代は、既に遠き過去に屬する。加特立教徒以外の社會にあつては、僧侶は最早有効なる警察官ではなくなつた。新教徒の教會に抱擁される賃銀労働者の信徒數は最早左程多くはないのである。新教徒の労働者達は聖書の教義を時代後れのものだと認める様になつた。彼等はそれに耳を傾けようともしないのである。新教々會は信徒に自由判斷力を行使する權利を許與した時、取りも直さず自己の死刑執行命令書に署名したやうなものである。加特立教會は常にこれが危険に着目してゐた。加特立教會がその信徒たる労働者間に大なる權力を有してゐるのは、労働者をして自ら思考するを許さないと云ふ、同教會の論理的にして徹底的なる政策に基くものである。二十世紀の今日に於いては、支配階級は僧侶の舊式陳腐な空談よりも遙かに

有力なる武器を有してゐる。即ち新聞紙が僧侶に代つて説教する様になつたのだ。今日、大多數の僧侶は饑餓に瀕してゐるのに、新聞記者が多額の報酬を受けて居る所以は茲にある。僧侶は「品物を渡す事」が出来ないから、資本家は僧侶に代金を拂はぬのである。

支配階級のあらゆる知識的雇人の中僧侶が最も貴重なりし時代もあつた。されど資本主義の出現と共に事態は一變したのである。蓋し資本制生産の下に於いては、労働者は機械使用の複雑なる過程を理解し得べき敏活の頭腦を要するのであるが、僧侶のやり方は徒らに奴隷の智力を破壊し、奴隷をして富の生産上に有用なる働きをなすこと能はざるに至らしめるからである。

學校教師は奴隷心理を生ぜしめるが、同時にまた右の如き生産上必要なる知識をも發達せしむる力を有してゐる。新聞記者は労働者の頭腦にブルデオア的思想を注ぎ込む事に妙を得てゐる。と同時に科學的思想を混入した放言に依つ

て、自己の勢力を維持する力をも有してゐる。

故に教師と記者と、同じ理由に依つて又大學教授とは、僧侶よりも厚級を受けてゐるのである。而して教職なるものは、今や益々不必要化しつゝある。

一九〇八年一月十三日、ピッツバーグ布教師聯合會の席上で、フィラデルフィアの一牧師ジョセフ・コクレインは次の如く述べた。

『布教師等の給料は餘りに安すぎる。而して過去十年間に於ける彼等の給料及び昇給率は普通の煉瓦運搬夫のそれとも比較にならぬ位である。』

『米國に於ける教育施設の現状は、二十五年乃至三十年前の状態とは全然正反對である。従前東部諸大學の卒業生にして布教師となれるものは八割に上り、法律家や醫師となり、又は實業方面に向ふ者は殘餘の二割に過ぎなかつたが、昨年の卒業生中布教師となれるものは二割半に過ぎない。即ち卒業生二十五人毎にたゞ一人の布教師を出してゐるに過ぎぬ。』

『今日、布教師たらんとして大學に入る學生達の大多數は、業半ばにして退學し、或は法律家或は醫師或は齒科醫となり、又は實業に従事する。彼等が教育を受けつゝある施設の空氣は、誠に悲しむべきものである。』

『今日の如き唯物的時代に於いて、布教師が不足するに至るは少くとも或程度までその給料の少なきことに起因するものである。』

斯くして、勞働階級の繼續的服従の原因を宗教にのみ歸するキツドの理論は、不斷に寧ろ急速にその立場を失ひつゝある。茲に於いて近世自由主義——自由思想——にのみ限られた宣傳も既に時代錯誤に屬することゝなつた。資本主義は、これよりも一層近代的にして且つ知識的なる武器をその武庫に詰め込んだのである。就中有効なるものは、新聞と講壇とである。而してこれが救治として勞働者等の側から提出すべき一つの武器は、彼等自身の新聞と講壇とであつて、彼等は今や此事實を従來よりも一層強く自覺し始めたのである。此

自覺が強烈となるに従つて、新たなる社會主義講壇が設けられ、社會主義の新聞は簇出することとなるのである。

かくて勞働階級は火花を散らして奮戦する。勞働階級はそれ自身の社會的智識を展開し、一の革命的心理を振興する。而して此心理たる實に、神學上その他の迷信から解放された現實界たる經濟的世界から來たるもので、それが充分の力を集合して民衆一般の上に表現する時、經濟上の奴隸制度の最終形態たる資本制度は過去の歴史の中に葬り去られて終ふであらう。

第七講 哲學の科學化

—コントとヘツケル—

一、哲學と科學の鬭争

オリギユスト・コントの出現は世界の思想史上に一新時代を劃した。コントの功績を一言にして盡せば、哲學の敗北、科學の勝利と云ふことである。

過去二千五百年の世界歴史は、これを思想的に觀れば、哲學對科學の鬭争史であつた。哲學は其の得意の王冠を雲間に聳かして、科學の惨めな存在に冷笑の眼を向けた。科學は如何うにかして此尊大なる哲學の玉座を奪ひ、その得意の鼻柱を挫かんことに千辛萬苦したのである。然しながら科學の力は及ばな

つた。その不撓の努力も多くは實らずに散る花の衰れを止むるにすぎぬかの觀があつた。哲學は愈々得意の胸を張り出して、時に、科學の餘りに俯甲斐なき運命に憐愍の一瞥を投げることもあつた。

けれども、その得意は躓て來たる失意の前徴である。低きものは遂に高められる。世人は次第に哲學の使命に對して疑惑を抱きはじめた。哲學とは、あてもなく大洋の眞中を漂ふ舵を失つた船ではないかと考へられて來た。それは何處より來り何處に去ると云ふ確たる目標がないのである。これに反して、科學は卑められながらも、常に一步一步前進した。さゝやかながらも絶えず宇宙の謎を一つ一つ解き來つた様に見える。その進行は遅い。けれどもその歩みは確實である。幾千萬里の天涯の彼方には、永へに動かざる導きの星がある。科學は絶えず此の星を望んで、牛の歩みの撓まぬ努力を續けて來たのである。斯くして近世に入るとともに、科學は次第に哲學の領域を冒して、遂に到頭

哲學をその玉座から大地へ突き落とした。然しながら科學は寛大である。その胸は迷信以外の何物をも包擁するのである。科學は破れたる哲學に對して、その一切の舊怨を捨てた。古き哲學は、新たなる科學の下に新らしき職分を與へられた。

哲學は斯くて、光輝ある新生涯に入り得たのである。彼れは最早、從來の如き尊大なる僭王ではなく、思辯の夢より醒め科學の親密なる兄弟とされなければならぬ。科學は刈る、而して哲學は集めるのである。新たなる哲學の任務は、實に此の科學の所勞の綜合といふことでなければならぬ。

二、コントの功績

哲學をして此の新使命に導いた最も光彩ある一人は、實にオーギュスト・コント其人である。コントに依つて、哲學は諸科學の科學となり得た。諸科學

を一つの組織にすべ括る綜合科學となつたのである。諸科學が宇宙の森羅萬象に對して、その夫々の領域内に於いてする諸現象の分類配列、その同じ分類配列を、哲學は一切の諸科學に對してなさなければならぬ。

この、諸科學の科學としての哲學の建設は、實に人類思想上一大轉期を意味するものである。その結果は、思想界の一大革命となつて現はれた。

コントが期くして世界の思想史に寄與した功績は、これを二方面に大別することが出来る。一は人類知識の分析、他は科學の分類である。

人類の知識的發達に對するコントの卓見は、後年現はれたヘッケルの生物發生論に對する前觸れの如き地位を占めてゐる。此等兩者の思想は、互ひに密接不離の關係を有するもので、夫々一を以つて他を補ふことが出来る。ヘッケルの發生論は、主として身體に關するものであつた。コントは専ら人間心理の發生過程を取扱つてゐる。これを論理的に看れば、ヘッケル出で、然る後コント

の出づべき順序を逆にして後のコントが前に出たと云ふところに彼れの創意がある。少なくとも彼れが、ヘッケル説を應用したものでないことは疑を容れぬ。

然しながら、コント説を充分に理解するには、先づヘッケル説を咀嚼玩味して置くことが便利である。この意味に於いて私は、歴史の順序を逆行して、ヘッケル説の證議から始めようとおもふ。

三、個體は種屬を繰返す

ヘッケルは、その發見にかゝる新説を、「生物發生の原理」と呼んだ。それは個體發生學及び種屬發生學なる二科の成果から推論したものである。種屬發生學とは、生物種屬の系統を調べる學問で、生物界に人間や、松茸や、ウリや、山猫やその他色々の種屬があることは、一體如何にして何處から生じたもので

あるかを調べるのが種屬發理學の任務である。

然るにこの系統調査の手掛りとなるものは至極空漠たるものであつて、これと云ふ確たる證據が無い。全く個々に引離しては如何とも手の施しやうがないのである。この系統調査の手掛りの中、比較的最も重要なものは化石である。そこで種屬發理學は、或意味に於いて化石學即ち古生物學の一部といった形を呈することになる。

これに反して、個體發理學の方は種屬の系統に頓着なく、各種屬中の夫々の個體の一代記に過ぎない。一の人間がその母親の子宮に宿つてから呱呱の聲を揚げ苦樂何年、而して墓場の土と化するまで、その間の發達過程を調べるのが即ち個體發理學の職分である。

然るに茲に一つ不可思議な事は、種屬の發生と個體の發生とは、共にその經路を同じくして進んでゐる事である。一種屬が何千年何萬年を経過して辿り來

つた其同じ過程を、一個體は僅かに數年又は數十年の生涯に於いて繰り返す。

これがヘッケルの所謂『生物發生の原理』の骨子であり、ヘッケルはこれを單に『個體發生の歴史は、種屬發生の徐々たる歴史を一氣に縮寫したものである』と云つた。試みに我々がトカゲや、蛇、海龜、駝鳥、馬、鯨、猿、猩々、人間、其他種々なる脊椎動物の胎兒を調べて見ると、その或る時期には必ず魚族時代の痕跡を示してゐるのを見る。即ちその頸の周圍には鰓の跡があり、その兩脇には鰭の跡がある。これは要するに、以上の諸生物が嘗て祖先の時代に、魚族であつたことを證據だてるものである。

ヘッケルはこの發生原理を以つて、人間が他生物から進化し來つたことの確かな證據となし、『進化説の如何なる反對論者と雖も、この不可思議な事實を説明することは出來ぬ。しかもこれは進化論に従へば遺傳と順應の原理に依つて、完全に説明し得るものである』と言明するに至つた。

四、コントの人知發達論

然しながら此説の精髓は、ヘッケル以前既にコントの思想に現はれてゐる。此説の(少なくともその精髓の)發見の前後を論ずるならば、ヘッケルは如何にしてもコントに一日の長たる名譽を譲らなければならぬ。

コントは人類の知識發達の段階を類別して、神學時代、形而上時代(哲學時代)、實證時代(科學時代)の三つとなした。神學時代とは人類の智的幼少期を意味し、形而上學時代は人類が漸くその粗笨なる迷信の夢から醒めて、哲學が次第に科學の征服に屈せんとするまでの時期を含む。最後に實證時代とは、即ち近世科學の出現以來今日に到る間を占めるものである。

勿論、斯く三分類に區別はしても、何時から何時までが神學時代であり、また形而上學時代であり、實證時代であると、數字に表はして判然と定めてある

譯ではない。夫々の時代の接觸線は模糊としてゐて、何づれの時代にも編入し得る過渡期が無限に連続してゐる。然しながら大體の特色から觀て、結局以上の三期に大別するの外ないのである。コントはこれを説明して次の如くいつた。

『神學時代に於いては、何等の實證を許さざる架空な想像が擅に活動する。

更らに形而上學時代には、各種の抽象や實在觀念を擬人視することが一般の特徵となる。最後に、實證時代は眞事實の正確なる觀察に立脚する。右の第一期は全く假りの一時的の時代であるが、然し何處に於いても人類は必ず此の時代を出發點とする。又、第三期は以上三時代中、唯一の永續的若しくは標準的の時代である。而して第二期はたゞ變更的若しくは溶解的影響力を有するのみであつて、隨つて第一期から第三期への推移を調節する所の働きをなす。我々は神學的想像から出發して、形而上學的論究を經由し、最後に實證的説明を以つて終る。かくて我々は、此の普遍的法則の助けに依り、人類の過現未に對す

る包括的概念を得ることが出来る』(コント著『人類的及び社會的發達の學說』)。

五、個人心理と人類心理の類似

以上述べた所では、格別ヘッケル説の先驅らしい趣きが見えない。然しコントは此の人類の知的發達の順序が又、個人の知的發達に再現することを提唱してゐる。即ち彼れは述べて曰く

「個人心理の發達は單に社會心理の發達の説明となるばかりでなく、同時に又その直接の證據となるものである。個人の出發點と人類全體の出發點とは同一であつて、個人心理の經過する各段階は人類心理の各時代に應當するものである。我々は自身の過去を顧みて、その幼少時代には自身が一個の神學者であり、青年時代には形而上學者、長じて成人するに及び自然哲學者(科學者)となつたことを認知する。苟くも時代の思潮に後れない人ならば、何人も此眞理を

自身に當嵌めて立證することが出来る』(コント著『人類的及び社會的發達の學說』)

これは前に紹介したヘッケルの『生物發生の原理』と同工異曲のものである。ヘッケルに依れば、嬰兒の身體はこれを大人に比べると三千年以上も我々の祖先の身體に近い。此の身體といふ中には、勿論我々の生理的器官の一なる腦髓も含まれてゐる。要するに小兒の腦髓は大人のそれに比して、遙かに原始的未開人に近く、随つて原始時代の我々の祖先に共通の神學的迷信は、同時に又、兒童心理の特徴でなければならぬ。斯くの如く考察する時、コント説はヘッケル説を其の儘、心理方面に應用したものと觀ることが出来る。歴史的にはコントの方が一日の長ではあるけれども、論理的には却つてヘッケルがそれであればならぬ。

六、科學の分類

コントの今一つの功績は科學の分類法である。後年現はれたスペンサーの綜合哲學の骨子は既に十分此の科學分類法の中に孕まれてゐる。米國の社會學者レスター・ウォードは、コント、スペンサーの科學分類法は根本に於いて、全然その揆を一にするものだと言つた。コントの科學分類法はスペンサーのと同じく單純より複雑へ、一般的より特殊的へと進むものである。

コントは此の順序に依つて、一切の科學を分類して次の六種に歸した。即ち(一)天文學(二)物理學(三)化學(四)生物學(五)社會學(六)倫理學。多くの社會學者は、(一)の天文學の上に更らに數學を置く。コントも亦屢々その方法を採用したが、彼れは數學を特殊の一科學と見ずに、寧ろ他の諸化學の共通的方法であり根本基礎であると見た。されば特殊科學の順序としては、矢張り天文學

を最初に置くに至當と認めた。

以上の六科學中、夫々後のものは必ず其の前のものから生ずるもので、謂はゞ親子の關係を示してゐる。即ち天文學は物理學の親、化學は物理學の子である。化學から生物學が生れ、生物學から社會學が生れる。倫理學は天文學と云ふ祖先から生じた最後の子孫であつて、直接には社會學に對し子の位置を占めてゐる。

以上の中、天文學は天體及びその法則を取扱ふ學問で物理學を包括する。而して化學は又物理學の中に包括される。物理學は質量力を取扱ひ、化學は原子力を取扱ふものである。天體も質量力も原子も、これを自然史上の順序よりいへば、總て生命の發現以前から存在してゐた。生物學は此の新現象たる生命を對象とするものである。勿論、生命といふ語の中には心理も含まれてゐる。さればコントはスペンサーの如く心理學を生物學と對立させずに、寧ろその一分

科と觀た。この點も亦ヘツケルに酷似してゐる。

社會現象は、生命現象の中比較的後に現はれた新現象であつて、社會學の對象と成るものである。更らにその社會現象中、道德的關係は倫理學の主題となる。

七、科學の研究方法

以上の外、いま一つコント自ら獨創を誇る重要な學説がある。彼れは科學の主なる研究方法を部類別けして、觀察、實驗、比較の三つとした。然るに前記の六科學を検討してみると、第一の天文學から最後の倫理學に到るに従ひ、此等の三方法の應用が進化的に異なつて來る。即ち天文學に於いては、單に觀察のみを應用し得るに止るが、物理學に於いては觀察と實驗の兩方法を併用することが出来る。また化學に於いては、觀察を主り實驗が主なる武器となる。更

らに生物學、社會學及び倫理學に於いては、比較がその主なる研究方法と成るのである。

八、科學の發達階梯

コントは右の科學分類法と、前に紹介した知識發達論とを巧みに組み合せて左の如き興味ある結論に到達した。即ち彼れが以上に分類した夫々の科學は、各個人及び人類全體と同じく、神學的、形而上學的、及び實證的三段階を経て進むものである。

例へば右の六科學中、天文學は最も古くまた最も一般のものであつて、既に神學的、形而上學的兩時期を經過して、純然たる科學的時代に入つた。これに反して、物理學は今尙ほ形而上學的殘滓を全く脱し得ない。更らに生物學になると、神學的形而上學的の痕跡がかなり多量に残されてゐるが、これも日を

逐ふて科學的要素に蠶蝕されて行きつゝある。

然らば社會學に於いては如何にといへば、これは最近に生れた新科學であつて、コントに依れば尙ほ著しく神學的及び形而上學的傳統に囚はれてゐる。寧ろ全然神學的状態に在ると云ふも過言でない。これ此科學が尙ほ幼少期に止まる所以であつて、かゝる傾向は倫理學に及んで更らに一層甚だしい。

世人は今日でも、社會の發達は科學の法則を超絶したものと考へてゐる。神意若しくは超自然力の支配に屬するものと考へてゐる。これは實に科學にとつて恐るべき打撃である。科學の進化とは畢竟、斯かる神學的障害を驅逐し一掃することではなければならぬ。

ニュートン、カント、ラブラース等は、夫々重力説や星雲説の發見に依つて天文學を神學の手から救ひ出した。マイヤー、ヘルムホルツ、ラヴオアジエリの三大學者は、精力保存及び物質不滅の法則を以つて化學を迷信の外に摘み出

した。またラマルク、ダーキン、ヘツケル其他の進化學者は、進化説及び自然淘汰説の武器に依つて、生物學の神學的要素を撲滅した。最後にコントは社會學に對して、これ等諸學者の功績に倣はうとしたが、その努力は不幸にして失敗に歸した。彼れの功績は社會學の完成でなくて、社會學の必要を認識し、社會學の任務の性質を豫測したことにある。

九、コントの空想

以上説く所に依つて、コント説の概要は分明になつた事と信ずる。彼れの提唱した知識發達論は、今日でも十分にその學理的價值を認められてゐる。その科學分類法も亦、決して無價値なるものではない。たゞ、彼れはこの論理上の分類を以つて、直ちに科學發達の歴史的順序と同一視した。この點は確かにコントの弱點であり、スペンサー一派に攻撃される所以である。然しながらこれ

は全般を揺がす問題ではなす。

次にコントのいま一つの弱點は、形而上的の思辯を嫌惡するあまり、現在解決の出來ぬ問題を直ちに不可解として排斥し去つたことである。例へば彼れは天體の化學的成份を確むることなどは、絶對的に不可能であると言明した。而も事實に於いて、フラウエンホーファー及びウォールストンの兩學者は後年この問題の解決に着手して、美事其の成功の端緒を開いた。

然しこれ等の弱點は何づれも些々たる問題であつて、元より彼の根本價値を毀けるには足りない。たゞ、茲に見逃しならぬ缺點は、彼れの社會思想に含まれる空想的分子である。

彼れの所謂實證社會なるものには、四つの階級がある。第一は資本家であつて、これは産業の管理を行ひ、第二は勞働者で専ら生産に對して勞力を提供する。第三は婦人であつて、これは社會的感情の供給を勤める。第四に哲學者と

欠

欠

トキンは、ボルシエヰキの革命主義に反対して有産階級と結托し、フィンランドの白衛軍を煽動した。

基督教的無政府共産主義のトルストイは、無抵抗主義を標語に、事實上舊露西亞の壓制政府を支持した。斯くて革命の勃發と同時に、彼れの屋敷は勞兵軍の掠奪する所となつた。

個人的無政府主義の提唱者マックス・スチルネルは、不幸なる失業労働者を笑つて『無能なる自我』と呼んだ。斯くの如き無能力者は『自己以外の何者にも據らず』といふ意氣がなく能力がない。彼等は寧ろ社會から放逐せらるべきものである。斯くして現状を呪ふことに於いて、最も革命的であることを自稱したスチルネルは、現状を維持する事に最も好都合な反動主義者と一變した。『結果はいつも豫想外』である。我々はこれよりスチルネルの妖怪的正體を解剖して見る。

三、保守的ヘーゲル

スチルネルの哲學的系統を調べるには、遠く一八三〇年まで溯ることを要する。即ちこの年以後、一八四〇年に至る歐洲哲學界の霸權を握つた者はヘーゲルであつた。ヘーゲルの哲學は、獨逸の諸大學で教授され普魯西の王室にまで侵入した。

普魯西王フリードリヒ・ウキルヘルム三世は、ヘーゲル哲學に優る哲學は無いと信じた。

『總て實在せるものは合理的であり、總て合理的であるものは實在せるものである』と言ふヘーゲル説を、ウキルヘルム三世は解釋して曰く『總て現存せるものは實在である。故に合理的である。故に正當である』と。正にこの意味に於いて、ヘーゲル哲學に優る王權の智的藩屏は無かつたのである。

英國の詩人、アレキサンダー・ポープの語を籍りて言へば、『現存するものは正當なり』と云ふのが、普王ウキルヘルム三世のヘーゲル觀であつた。

これは、警察的政府に極めて都合のいい哲學である。斯程まで露骨に普魯西の検閲官と秘密法廷を喜ばしめた哲學は他になかつた。斯くしてヘーゲル哲學は普魯西王家の保護の下に繁榮を擅にした。

獨逸全國の思想界を席捲し去らんとする此の反動思想の魔力を目撃して、當時進歩主義者を以つて自任してゐた自由思想家等は、腕を扼して痛嘆の聲を發した。

四、革命的ヘーゲル

然るに豈圖らんや、結果は豫想外であつた。一見反動思想の權化とも見えたヘーゲル哲學の半面には、實に驚くべき革新思想の種が含まれてゐた。この革

新思想の種こそは、總てマルクスの手によつて培はれ、近世に於ける社會民主主義若しくは社會主義の哲學的根底となつたのである。

革新派ヘーゲル學徒の説に依れば、ヘーゲルの所謂『實在』なるものは、ウーヘルム三世の觀た實在とは雲泥の相違がある。ヘーゲルにとつて、實在は『必然』を含む。即ち實在すると同時に必然なるものでなくては、眞の實在といふことはできない。隨つて『總べて實在せるものは合理的である』といふことは、即ち『總て必然なるものは合理的である』といふことに歸する。エンゲルスは此間の關係を説明して『ヘーゲルの眞意は總て現存せるものが例外なしに實在だと云ふのではない。現存して同時にそれが必然的なるところにのみ實在性は生ずるのである。實在はその發展上いつかは必然として現出する。而して必然なるものは結局、合理として現はれる。故にヘーゲルの論法に従へば、古き實在は不實在となつて必然性を失ひ、存在權を失ひ、合理性を失ひ、その代償として新しき有力なる實在が生ずる。即ちこれを逆にすれば、總て合理なるものは如何に現状の實在と矛盾する如くであつても、遂には實在となつて現はれる。茲に於いて、總べての現存事物は、究極に於いて滅亡せねばならぬといふ價値を有してゐる』と言つてゐる。

手近かな例として、徳川家康が豊臣の殘黨を抑へて天下の實權を掌つたのは實在である。爾後二百年、日本の霸權が徳川の手に獨占されたのも同じく實在である。然しながら同じ實在の中にも、必然性の度合は絶えず動搖してゐる。殊に幕末に及んで尊皇攘夷の徒が各地に蜂起した頃には、社會の必然は次第に徳川政府を棄て、これ等尊皇攘夷派の實在に移つて行つた。かくして徳川政府は表面實在してゐるやうであつても、その實既に不實在となつて、心然性を失ひ存在權を失つたのである。一方、徳川政府に反抗した當年の志士論客は、外見如何に現状の實在と衝突するかに見えても、その衝突するといふことそれ自身

の中に、既に一個の合理が孕まれてゐたのである。かくて徳川政府は遂に不合理となり、不必然となり、不實在となつた。

ウキルヘルム三世は、ヘーゲル哲學に依つて、その王冠に萬世不易の後光を副へようとしたが、何ぞ圖らん、ヘーゲルに依ればその王冠は、必然の間だけ實在するものであつたのである。

斯く解して來るとき、ヘーゲル哲學は反動思想どころか、實は驚くべき革新思想を孕んでゐることが知られるが、遺憾ながら此革新思想は、彼れの哲學的方法論的方面にのみ限られて、彼れの哲學の全體系には滲徹しなかつた。それは何故かと云へば、彼れの哲學體系は元來唯心論に立脚するものであつて、隨つてこの進化的革新思想を吸収すれば、勢ひ挽回すべからざる論理的矛盾に陥つて終ふからである。

五、ヘーゲル哲學の矛盾

ヘーゲルの哲學體系に依れば、物質世界は觀念から、即ち絶對觀念から派出したものである。これを神學的に言へば物質世界は神靈の顯現に外ならない。

然るに方法論から行けば、ヘーゲルの合理といふ觀念は、何うしても物質的實在から生じたものでなくてはならぬ。然らざれば、「總て實在せるものは合理的なり」といふ命題は意味をなさぬことになる。ヘーゲル哲學は茲に於いて、板挟みの絶對絶命の境地に立たされた。

この板挟は纏てヘーゲル學徒を二派に分裂せしめた。その一派は所謂ヘーゲル右黨と稱するもので、ヘーゲルの唯物的方法論を排して、彼れの哲學體系を其儘に繼承した。随つて此の派は極端なる保守反動に陥つた。他の一派はヘーゲル左黨と稱し、ヘーゲルの方法論を繼承してこれを唯物的哲學體系と結びつ

けた。この派は當時に於ける急進思想の本陣となつた。カール・マルクスの唯物的歴史觀は實に此の派の到達すべき究極の運命であつた。

六、偶像から偶像へ

然しながらヘーゲル左黨の哲學から、マルクスの唯物史觀に到達するまでには、尙種々なる曲折をまぬかれなかつた。その最も代表的な橋渡しとなつたものは、ルードキヒ・フオイエエルバッハとマックス・スチルネルの兩者である。

フオイエエルバッハはヘーゲル哲學の矛盾を最初に解決した殊勳者で、彼れは其著『基督教眞髓』に於いて、『人間と自然との外には何物もない。人間よりも自然よりもヨリ高級なる實在と稱するものは、實は人間の宗教的想像が生んだもので、畢竟我々の個性の想像的反映に外ならぬ』といつた。

これを哲學的の語にいひ換へれば、思想は物質世界から生じたものである、

といふことになる。この新哲學は、當時の急進的青年を欣喜雀躍せしめた。エンゲルスはこれに就いて、『この思想は實に、何等の粉飾なく極めて卒直明白に唯物論をその舊王位に引上げたものである。……ヘーゲル哲學の絆は斷たれ、その體系は形を失ひ四散した。その矛盾は單に人間の想像の中のみあつたがため美事に解決された。……熱心は隨所に漲り溢れた。我々は一齊にフオイエエルバッハの學徒となつた。マルクスは此新思想を如何に熱心に歓迎したか、而して又それに依つて、如何に深大の影響を受けたか、それは彼れの「神聖家族」を見れば明かに解る』と云つてゐる。

然るに茲に、同じヘーゲル左黨の間から、フオイエエルバッハの強敵が現はれた。それはマックス・スチルネルである。

スチルネルは、神が人間を造るにあらずして人間が神を造るものであるといふ、フオイエエルバッハの説を承認した。けれどもフオイエエルバッハは斯く一方

に神といふ抽象觀念を打破すると同時に、他方に於いて人類といふ抽象觀念を神に祭り上げた。これでは折角の偶像打破も無駄になり、神の壓制から救はれて、人類と云ふ偶像の奴隷となることは、屈從の交代以外に何事をも意味しないことになる。

『人類の本質が人類の至上實在である。然るに宗教は至上實在は神であると呼ぶ。而してこの神なる至上實在は、客觀的本質と見做されてゐる。けれども實際に於いて、この至上實在は人類の本質に過ぎないのである。故に爾今世界の樞軸となるものは、最早神が神として人類に對することではなく、人類が神として人類に對することである』と云ふフオイエルバッハの説にスチルネルは反對して曰く『これでは少しもフオイエルバッハの要求する如く、個人の奴隸状態を打破したことはない。單に古き暴君を廢して、新らしき暴君を擔ぎあげたものに外ならぬ。勿論、フオイエルバッハは、この暴君を神として

個人の外に求めず、全く個人の内に在るものと解した。然しながら、暴君が個人の内に在ると云ふことは、暴君の暴君たる所以には何の關りも無い。その本質が私の内に在ると考へても、私の外に在るといつても本質の上に變りはない否、その内外の區別そのものが、既に全然無意味である。何故ならば、基督教に依れば、神の靈は同時に我々の靈であつて、我々の内に住むからである。』斯くのごとく、マルクス、エンゲルス等が人類解放の先驅として歡呼したフオイエルバッハは、スチルネルにとつて宗教的偶像の兩替者たるに過ぎなかつた。

スチルネルが排斥したのは單に此人類といふ抽象觀念ばかりではなかつた。個人は斯くの如き抽象の偶像以外に、尙ほ正義とか自由とか、善とか美とか、國家とか法律とか云ふものに依つて縛られてゐる。これ等はいづれも個人の奉仕すべき大目的を有してゐる。然るに個人の奉仕を許さぬ唯一の目的は、個人

自身の目的である。

以上の諸偶像は、いづれも個人に對して自己否定を強要してゐる。然らば彼等自身は、多少でも自己否定してゐるかと思ふに、決してさうではない。彼等はただ彼等自身に奉仕するのみである。

『神に關することは神の問題である。人類に關することは人類の問題である。私の問題は神でもなければ、人類でもない。眞善美でもなければ、正義でも自由でもない。たゞ私だけに關した問題である。それは普遍的の問題でなくて、單一無二の問題である。即ち私自身が單一無二であると同様に——。』『私にとつて私自身より尊いものはない。』

七、スチルネルの幽霊

斯くしてスチルネルは『自己所有』を宣傳した。個人は個人以外は一切の支配

から脱却しなければならぬ。そしてたゞ自分自身のみ奉仕しなければならぬこれが彼れの無政府主義の歸着點であつた。彼れは斯くして個人を一切の偶像から救ひ出したと考へてゐる。

然し我々から見れば、斯く一切の支配から脱却したと稱する個人その者が、實は基督教の神と同じく偶像である。試みに考へるならば、斯くの如く自ら自己を支配し、自ら自己にのみ據る個人と雖も、それが人間である限り、矢張り我々と同じく生活しなければならぬではないか。生活には衣食住が必要である多數人類の協力に俟たずして、我々の衣食住が如何に造られるであらう。自ら人に仕へ、人をして自らに仕へしむるこの共同生活の原則を離れて、人は一日もその生を維持することは出来ぬ。一切の周圍を脱却して、單に自ら自己を支配し所有する個人などのあり得る譯がないのである。そんなものを有るらしく考へることが、既に耶蘇教以上の痴呆でなければならぬ。

單にそれのみではない。今日の如き階級對立の社會に於いて、無産者がその勞働力を商品として、雇主に販賣せねば生活の出來ぬ状態の下に『自己所有』とは何事ぞ。自己の生存維持に必要な一切の機關が、他人の有に屬してゐる社會に於いて、我々は何うすれば自己に自己を所有せしめ得ると云ふのだ！

若しスチルネルの自我主義に多少の眞理ありとすれば、それは無政府主義的個人主義的の眞理でなくて、社會的、團體主義的の眞理でなければならぬ。スチルネルが區別した専制君主も、無智なる人民も、自我的たる點に於いて何等の差異がない。若しその間何等かの差異があるらしく見えたとすれば、それは彼等の社會的境遇が違ふからである。人民は博愛のつもりで暴君に奉仕して居るのではない。暴君に奉仕することが、現在に於いて最も有効なる自己奉仕だと信ずればこそ、暴君の暴政にも唯々として黙從するのである。

さればスチルネルにして、若し眞に斯くの如く『愚民』を其黙從状態から脱却

せしめんとすれば、彼れは何事よりも先きに彼等の境遇の改善を圖らねばならぬ筈である。随つてスチルネルの自我主義を是認するとしても、それを實行するの道は、自己所有の福音を説くにあらずして境遇改善の社會運動を實行することである。即ち無政府主義の宣傳でなくて、國家社會主義の實行でなければならぬ。

スチルネルはフォイエルバッツハの偶像を攻撃して、フォイエルバッツハ以上の痴愚的偶像を押し立てた。フォイエルバッツハの缺點は偶像の兩替ではなく、唯物思想の不徹底なることにあつた。彼れは至上の實在を人類に求めた。然しながら人類とは何であるか、それは要するに個人の集積ではないか。こゝに於いて至上の實在は人類でなくて個人だといふことになる。この意味では、スチルネルの疑義は強ち意味なきことではない。

八、ヘーゲル左黨の完成

然しながら、個人は單に個人としては何等の意義なきものである。個人は社會としてのみ存在を維持することが出来る。随つて至上の實在は個人ではなく社會であると云ふことになる。

フオイエルバッハを繼承して、彼れの結論を此方面に求めたのもは即ちマルクスの唯物史觀である。

マルクスは言ふ。物質世界は神學的、哲學的一切觀念の母胎である。故に唯一の實在は、この物質世界の外部に求めることは出来ぬ。人間は物質世界の、即ち自然の所産である。社會は人間と自然との合體である。社會の根本は、物質的欲望を充たすに必要な資料を獲得する物質的の機關から成立してゐる。故に社會の一部が此重要なる機關を獨占してゐる限り、かかる機關から除外さ

れた他の一部の人々は、勢ひ物質的の奴隷とならねばならぬ。然るに心は物の所産であるから、この物質的の奴隷状態は同時に又、精神的奴隷状態を生み出すことになる。されば此物心兩面の奴隷状態を一掃するには、先づ其根本の物質的原因を除去しなければならぬ。マルクスの唯物史觀は、斯くして社會革新論に應用される。

ヘーゲル左黨はスチルネルに於いて逆轉した。フオイエルバッハは、實にこの逆轉と前進との分岐點に立つたものである。

第十講 單稅論の正體

——資本主義の辯護人ヘンリー・デジョージ——

一、土地と資本の争ひ

時代が人物を造る如く、人物が時代を造ることを以つて不動の眞理としても時代を造る人物がまた時代の産兒であることを拒むことは出来ない。

ヘンリー・デジョージの偉才は、慥かに一つの時代を生んだ。然しながらその後には横はる時代の要求は、更らに直接の刺戟力を以つて彼れの偉才を操つたのである。

ヘンリー・デジョージの名は單稅論に結ばれてゐる。然らば單稅論とは如何なるもので、如何にして生ずるに至つたか——我々はその如何なるものかを検討

するに先き立つて、先づその如何にして生じたかを調べなければならぬ。而してこれを研究するの順序として、我々は遠く封建制度に溯る必要を認めるのである。

封建制度はこれを經濟的に言へば『土地社會』である。その主なる労働者は農奴であり、彼等は土地に縛られてゐた。而して彼等の權力階級は領主であり大地主であつた。當時法律の大部分は、總て土地に關聯してゐた。所領の大小は權力の大小を決定したのである。

封建制度は明かに社會制度の一つである。總ての社會制度は變化する。封建制度も亦變化した。その滅落の徴は既に十八世期の初期に萌し初め、十八世期末葉には全く覆滅し終つた。

けれども、土地は尙重要な物質的及び社會的要素であつた。斯くて土地諸侯の社會的權力が資本諸侯の手に移つた後も、彼等は尙有力なる敵手として資

本諸侯に對抗すべき實力を保持してゐた。封建制度が倒壊して、近世資本主義社會が成立した後數十年間の階級闘争は、矢張り從來の如く資本家對地主の繫争であつた。たゞ、從來は土地が優勢で資本が劣勢であつたが、今や反對に、立場を替へて資本が優勢となり土地が劣勢となるに至つた。

二、労働階級が漁夫の利

この土地對資本の闘争に於ける最も標本的なる發現は、英國に見ることが出来る。當時労働階級は尙いまだ獨立の主義主張を形成するに至らず、團體としての勢力も至極微弱であつたが、それでも既にかんりの重要な役目を演じてゐたのである。

地主階級は獨立の政黨を組織してゐた。保守黨がそれである。資本家はこれに對抗すべく自由黨に根據を置いた。かくて保守黨は主として其投票を都市に

於ける資本家階級の犠牲者から集めたもので、工場法の通過を迫つたのも彼等保守黨であつた。即ち彼等はこれに依つて、工場主の利潤を削減しようとしたのである。然るに自由黨は又地方の借地農及びその農業労働者の間を遊説して、常にこれ等農民階級の爲に、地主の不利益となる如き法案の通過を計つたのである。かくて資本家對地主は、互ひに齒をむき爪を鋭らして利益の争奪を事としてゐる間に、全國の労働階級は坐ながらにして漁夫の利を占め得た。一の労働組合なく労働黨なき労働階級が斯くの如き有利の地位を占め得た事は近世史上稀に見るところの奇現象である。

斯かる間に資本家は益々富み成長した。彼等は窮餘の地主から土地を買つた。同時に地主は其貨幣を以つて株券を購ひ社債に應募して次第に都市の商工業に侵入して來た。茲に於いて、資本對土地の、階級的差異は次第に抹殺され随つてその闘争もいつの間にか鎮靜に歸したのである。勿論、自由黨と保守黨

とは今尙ほ依然として對立はしてゐる。けれども其對立は、表面のみの對立であつて、事實は既に一體である。

勞働階級は最早や從來の如く、不即不離の地位を守る事が不可能となつた。何故ならば彼等の乗すべき漁夫の争闘が絶たれたからである。斯くて勞働階級は勢ひ獨立の政黨を建設せねばならぬ羽目に立つた。

三、地主に對する義人の叫び

我々は茲で、これ以上政黨變遷の跡を探る必要はない。我々の問題とするところは、この滅亡に近づいた地主階級と、發育盛りの資本家階級との間に於ける社會的利害の衝突である。謂ふ所の階級闘争である。

この闘争は十九世紀全體に亘り、殊にその初期に於いて最も激烈を極めた。地主階級は有名なる穀物條例を制定して、小麥の關稅を引上げた。これがため

パンの價格は二倍以上の暴騰を來した。かくて一般人民殊に勞働者の生活費は著しく昂騰したのである。茲に於いて、資本家は勢ひ彼等にとつて堪え難き負擔であるところの賃銀値上げを實行しなければならなくなつた。

斯くして遂に『義人』の聲が揚げられた。コブテンは起ち、ジョン・ブライトは叫んだ。穀物條例撤廢の運動は到る所に起つた。これを以て彼等は首尾よく小麥稅を撤回することが出來たが、同時に米國の小麥は續々英國に侵入して來た。英國の小麥は到底よくそれと拮抗をなし得なかつた。その結果、小麥耕作地は殆ど全く栽培中止の状態に陥つた。この闘争の間、資本家と地主とは、社會のあらゆる悲惨貧困を互ひに相手の責任に轉嫁し合つたのである。

四、スペンサーとヘンリー・ヂョーヂ

資本家階級の富力が増大するに従つて、その知識的代辯者の數も亦ますます

増加した。地主階級に對する資本家の不満は、主として次の二點に集中した。第一に、地主階級が工場法案の通過を計り、兒童の勞働を制限することに依つて、資本家の利益を削減したこと、第二に、資本が工場で得る利益の一部が、地代となつて地主の懐ろに流込むこと。茲に於いて資本家の第一の不満を是認し、これに學問の衣裳を纏はしめた數多の學者があらはれた。その最も偉大なる一人はスペンサーである。スペンサーは、極力工場法の實施に反對した。兒童勞働の制限は、奴隸制度の復活であるとまで極言した。

スペンサーと並んで、右の不満を辯護した學者も亦多くあらはれた。而してヘンリー・ヂョーヂはその最も優れた一人であつた。彼れの單稅論は畢竟するところ地代の官沒に過ぎない。そしてこの官沒に依つて利するものは、大多數庶民ではなく、主として資本家階級のみである。即ち彼れは、國家に對する國民の負擔を悉く地主の肩に轉嫁せしめようと努めたのである。彼れにとつて

資本家は掠奪階級にあらざして、被掠奪階級であつた。彼れの目には、資本家の受くる利潤は不當にあらず、全く神と自然の掟に従ふものであつた。資本と勞働は不離一體である。その利害は全く一致する。高率の利子は貸銀の高きことを意味し、低廉の貸銀は低廉の利潤を意味する。社會に二つの掠奪者なし、たゞ一つの掠奪者が存するのみ。それは、即ち地主である。故に資本家と勞働者とは、互ひに協力して共同の敵たる掠奪者に向はなければならぬ、と説き、而して彼れは地主から土地を沒收することを主張せず、單にその地代を租稅として沒收すれば足ると説いたのである。國家は此租稅だけで國費を充分に支辨するに足る收入を得るから、他の一切の租稅は不要に歸する。かくして現社會を呪ふ悲惨貧困は、悉く跡を斷つに至る。これが彼れヘンリー・ヂョーヂの單稅論の要領である。